

# 武藏国からみた黒色土器の消長と展開

渡邊理伊知

**要旨** 武藏国（埼玉県・東京都・神奈川県の一部地域）において主に8世紀～11世紀にかけて出土した黒色土器を集成して検討を行った。その結果、武藏国内の各地域によって黒色土器の傾向が異なる状況を確認することができ、地域によって黒色土器が普及する時期にも違いが認められた。なかでも、8世紀後半頃に普及していくパターンと9世紀後半頃に普及していくパターンがあり、これらは別の要因によるものと捉えられる。

8世紀後半頃に黒色土器が普及していくが、そこには須恵器工人の関与が窺える。その後、須恵器の出土比率が低下すると比例するように黒色土器の出土量が増していく地域があり、当初普及した要因としては水の浸透を低下させるなどの機能面から普及していくと想定した。その後、9世紀後半から10世紀代にかけて普及していく要因としては、施釉陶器との共伴関係や周辺地域での出土状況との比較から機能面以外の要因を求められたものと想定した。

また、甲信地域の黒色土器は内面に放射状ミガキ調整が施されるタイプが主体であり、関東地域は横方向のミガキ調整が主体であるが武藏国にも放射状ミガキ調整のタイプが少量認められる。

## はじめに

筆者は平成29年（2017）11月に帝京大学文化財研究所・山梨県考古学協会の共催で開催された研究集会『「俘囚・夷俘」とよばれたエミシの移配と東国社会』において埼玉県内から出土した黒色土器の集成を行った（註1）（田中・渡邊2017）。

その際、埼玉県域における8世紀～11世紀の時期に収まる黒色土器を1,226点抽出することができた。黒色土器が俘囚・夷俘と関連があるのかは今後も検討を要する課題であるが、この集成において埼玉県内だけでも地域ごとに傾向の違いが表れることが確認できた。

そこで本稿では、その後に追加された資料や遗漏した資料を加えるとともに、東京都と神奈川県の武藏国域に含まれる地域の資料を追加することで武藏国全体を対象とする。それにより、武藏国内の地域ごとに黒色土器の傾向を確認したうえ

で、他地域での状況と比較しつつ、黒色土器の消長と展開についての研究を行うための基礎的な検討を行おうとするものである。

## 1 研究史

黒色土器の研究は田中琢による研究が端緒といえよう。田中琢は土師器→黒色土器→瓦器と段階的に進行する機能改良説を唱えている。また、黒色土器の方法として炭素吸着による方法を想定し、内面のみを黒色処理されているものをA類、内外面ともに黒色処理を施すものをB類と分類しているなど後の研究の礎となる問題提起が行われている（田中1967）。

次いで小笠原好彦は黒色処理の方法として田中による炭素吸着による方法以外に黒漆などを塗布するという方法を提示するとともに時期ごとの分布域の変化を想定した（小笠原1971a, b）。

また、平成元年（1989）に開催された東國土

器研究会において「黒色土器—展開と終焉」というテーマで平安時代の東日本を中心とした検討が行われ、翌年の平成2年（1990）にその成果がまとめられている。

対して西日本における黒色土器研究は森隆による一連の研究成果が挙げられる（森 1989, 1990a, 1990b, 1990c, 1991, 1995）。森は黒色土器の定義として、「いぶし焼きにより器面表面に炭素を吸着させて黒色処理を施した土器」、「奈良時代に畿内の都城で出現し、定型化した土器」、「都城の黒色土器の影響下に平安時代以降の各地で生産された同種の土器」、「器表面の緻密なヘラミガキ手法といぶし焼手法とのセット関係」としている。この定義に当てはめれば、関東地方や東北地方でみられる古墳時代の土師器に黒色処理を施したものとは異なるということになる。

黒色処理の処理技法についての研究としては、安田光二によって焼成実験を行われている（安田 1975）。それによると黒色処理は「2次の焼成やいぶし黒や油性の焼成処理ではなく、明らかな炭化である」という実験結果を報告している。

しかしその後、平成4年（1992）には桜岡正信、佐々木幹雄の両氏による実験的な研究によって黒色処理の吸炭方法について成果が報告されている（桜岡・佐々木 1992）。それによると土器の黒色処理化には一次焼成である必要はなく、二次焼成によって黒色処理を施すことが可能であるという一次焼成時に黒色処理できないとした安田とは異なる結論を導き出している。

黒色処理を行う目的としては、奈良国立文化財研究所（当時）の『平城宮発掘調査報告XIII』において「黒色土器は水もれを防ぐために土器の表面に炭素を吸着させた焼き物で、一種の改良型土器とも言うべきものである。」との見方を示し、また「畿内では、8世紀以前には黒色処理の技法の伝統はなく、東日本の影響を受けて8世紀の初め頃に成立する。」と黒色処理技法の出現を東

日本に求める見解を示している（奈良国立文化財研究所編 1991）。

菅原正明の研究によると黒色土器と瓦器との比較によって、瓦器より黒色土器のほうが硬質で吸水性が低く不透水性が高いとしている。そしてその要因は黒色処理によるものではなく、内面に認められるミガキによるものとしている（菅原 1989, 1995）。いずれにしてもミガキと黒色処理を行う目的の一つに透水性の低さが想定されている。

内田亜紀子は富山県富山市に所在する任海宮田遺跡出土の黒色土器25点について、内面のミガキ調整を見込み部分から口縁部内面にかけて区分し、ミガキ調整の単位ごとに分類している（内田 2001）。それによると、検討対象として取り上げられた黒色土器の多くが口縁部内面から体部内面にかけて横方向のミガキ調整のものである。他に、底部と体部の境目を中心とする部位で見込みの周囲部分としている範囲において、放射状のミガキ調整が施されているものが認められる。

安田龍太郎は黒色土器の先に瓦器を位置づけたうえで「黒い色は漆器をめざしたものであり、それ故に漆器指向の土器としての完成品である瓦器は漆器の普及によって消えていくことを推定」している（安田 1995）。

このように黒色土器の研究は1980年代後半から90年代にかけて積極的に進められた。その後はこの頃の研究成果をもとに各地域において個別の研究が進められるようになっていった。

各地域における主な研究としては、平成元年（1989）の東国土器研究会以前のものとしては、原明芳による長野県の松本平を中心とした研究（原 1987）、桜岡正信による群馬県における研究（桜岡 1988）がみられる。以後のものでは、末木啓介による埼玉県における研究（末木 1999）、内田亜紀子による富山県における研究（内田 2001, 2002, 2003）、佐藤俊祐による徳島県

における研究（佐藤 2012）、渥美賢吾による茨城県における研究（渥美 2018）などが挙げられる。

そして、平成 27 年（2015）に東京都多摩市の上原遺跡から出土した球胴甕が北上川流域由来の赤彩球胴甕であることが平野修によって突き止められると、これが俘囚・夷俘にかかわる痕跡であると位置づけ、そのほかに俘囚・夷俘を想定できる可能性がある資料として長煙道のカマドを持つ竪穴建物跡とともに黒色土器を取り上げている（平野 2016、2017）。

## 2 黒色土器の位置付けと分類

黒色土器の位置付けとしては、前述した森隆の研究成果をはじめとして、これまでの研究成果から 7 世紀後半までにみられる土師器の内面を黒色処理したものと、8 世紀後半以降に普及していくいわゆるロクロ土師器（註 2）とは基本的には連続しないという認識が大勢を占める。本稿においても、基本的には 8 世紀後半以降の資料を取

り扱う。

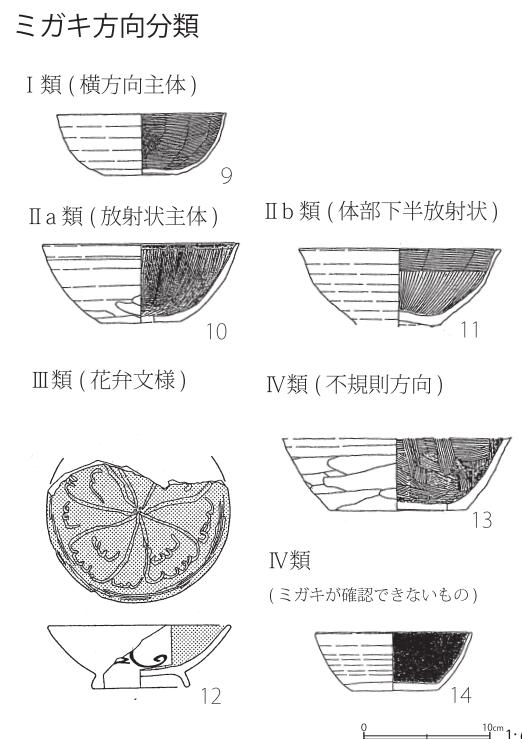
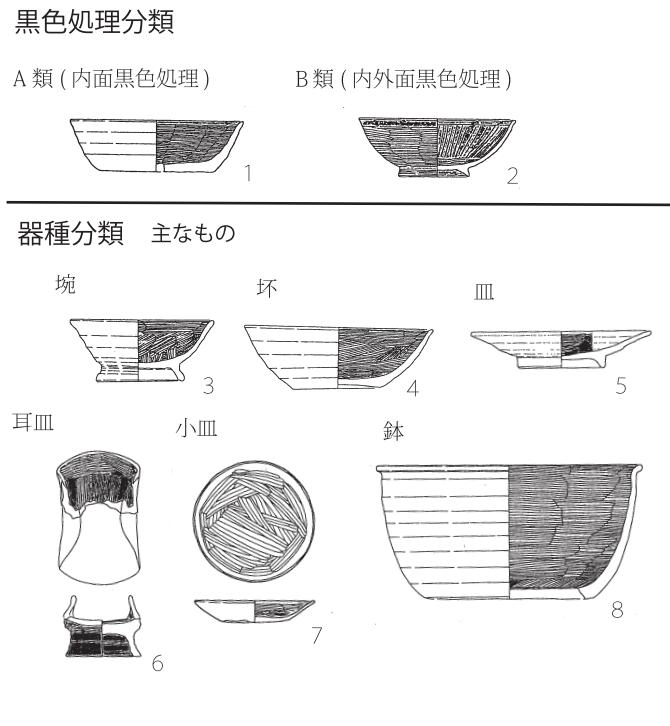
黒色土器の分類については、田中琢による先行研究に則り、内面を黒色処理されたものを A 類とし、内外面ともに黒色処理されたものを B 類とする分類に基づいた。

また、本稿では体部内面のミガキ調整の方向による分類を行う。

- I 類 主に体部内面上半から口縁部内面にかけてのミガキ調整の方向が横方向に口縁部と並行ぎみにミガキ調整が施されているもの。
- II 類 見込みから口縁部方向にむけて放射状にミガキ調整が行われているもの。

細分として、

- II a 類 口縁部直下まで放射状のミガキ調整が達するもの。
- II b 類 体部内面上半は横方向のミガキ調整部 内面下半は放射状のミガキ調整となるもの。
- III 類 花弁文様を施すもの。
- IV 類 不規則な方向など、これら以外の方向でミ



第 1 図 各種分類図

ガキ調整が行われているもの。

V類 ミガキ調整の単位や方向が確認できないものの、摩滅して確認できないものも含む。

器種は、主なものとして塊、壺、皿、小皿、耳皿、鉢、その他に分けた（第1図）。

### 3 武蔵国における黒色土器の集成

集成（註3）の結果、177遺跡から黒色土器を確認することができた（第2図）。以下、地域ごとに区分した（註4）。

#### （1）埼玉県域について（第3・4・5図）

埼玉県については、前述の通り以前に集成している。今回追加した資料を加え総数は1,310点となった。

これらを以下の地域ごとに区分する。各地域名は便宜上、主な郡名からとった。

- ①児玉・加美地域（児玉郡、加美郡）、
- ②大里・榛沢地域（大里郡、榛沢郡、幡羅郡、男衾郡、那珂郡）
- ③比企・入間地域（比企郡、入間郡、横見郡、高麗郡、新羅郡）
- ④足立地域（足立郡）
- ⑤埼玉地域（埼玉郡）
- ⑥葛飾地域（大落古利根川の左岸側、下総国葛飾郡の一部）
- ⑦秩父地域（秩父郡） 黒色土器が確認できなかつた。

大まかの傾向としては比企・入間地域においては全時期を通じて黒色土器の出土量は少ない。しかし、埼玉県域では最も早くに黒色土器が出現した地域といえる。

児玉・加美地域と大里・榛沢地域においては、9世紀中葉頃から出土量がやや増加していく、10世紀後半になると一気に増加する。

埼玉地域と葛飾地域については9世紀前葉頃から増加していく9世紀後葉に出土量がピークを迎え、10世紀前葉には減少していく傾向にあ

る。最も出土点数の多い地域も埼玉地域であった。

足立地域については9世紀代にかけて出土量が増加していく、10世紀前半にやや減少した後10世紀後半から11世紀前半にやや増加する傾向にあるが、他地域のように一気に増加するような状況ではなく、概ねコンスタントに出土しているといえる。

#### （2）東京都・神奈川県域について（第5図）

東京都・神奈川県は、武蔵国に属した地域を以下の4地域に区分した。

- ⑧国府域（府中市、国分寺市とする。）
- ⑨多摩地域（国府域以外の多摩郡）
- ⑩豊島・荏原地域（豊島郡・荏原郡）
- ⑪橘樹・都筑・久良地域（橘樹郡・都筑郡・久良郡）

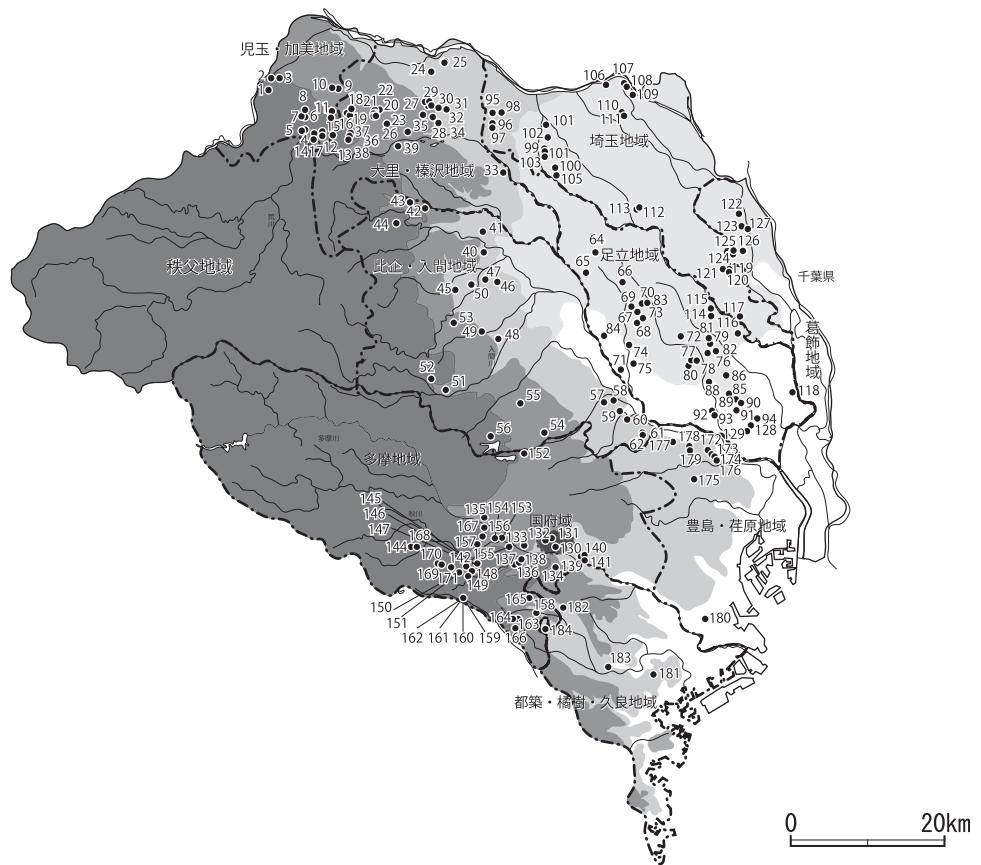
なお、豊島・荏原地域（特に豊島郡）は近世に大部分が江戸御府内に属し、大規模な開発を受けているため、それ以前の様相が不明瞭となっている。以上のことを踏まえて検討をおこなった結果、黒色土器が土器組成の主体を占めることはないが、多摩地域を中心に9世紀後半以降になると増加するとみられる。

豊島・荏原地域では豊島郡家周辺で確認されているが、点数自体は多くない。橘樹・都筑・久良地域においても少数の出土が認められる。東京都・神奈川県では、武蔵国府関連遺跡や落川・一宮遺跡などの遺跡では、多数の出土が認められるが、多くの遺跡では、まとまった出土状況はみられない。

### 4 黒色土器の様相

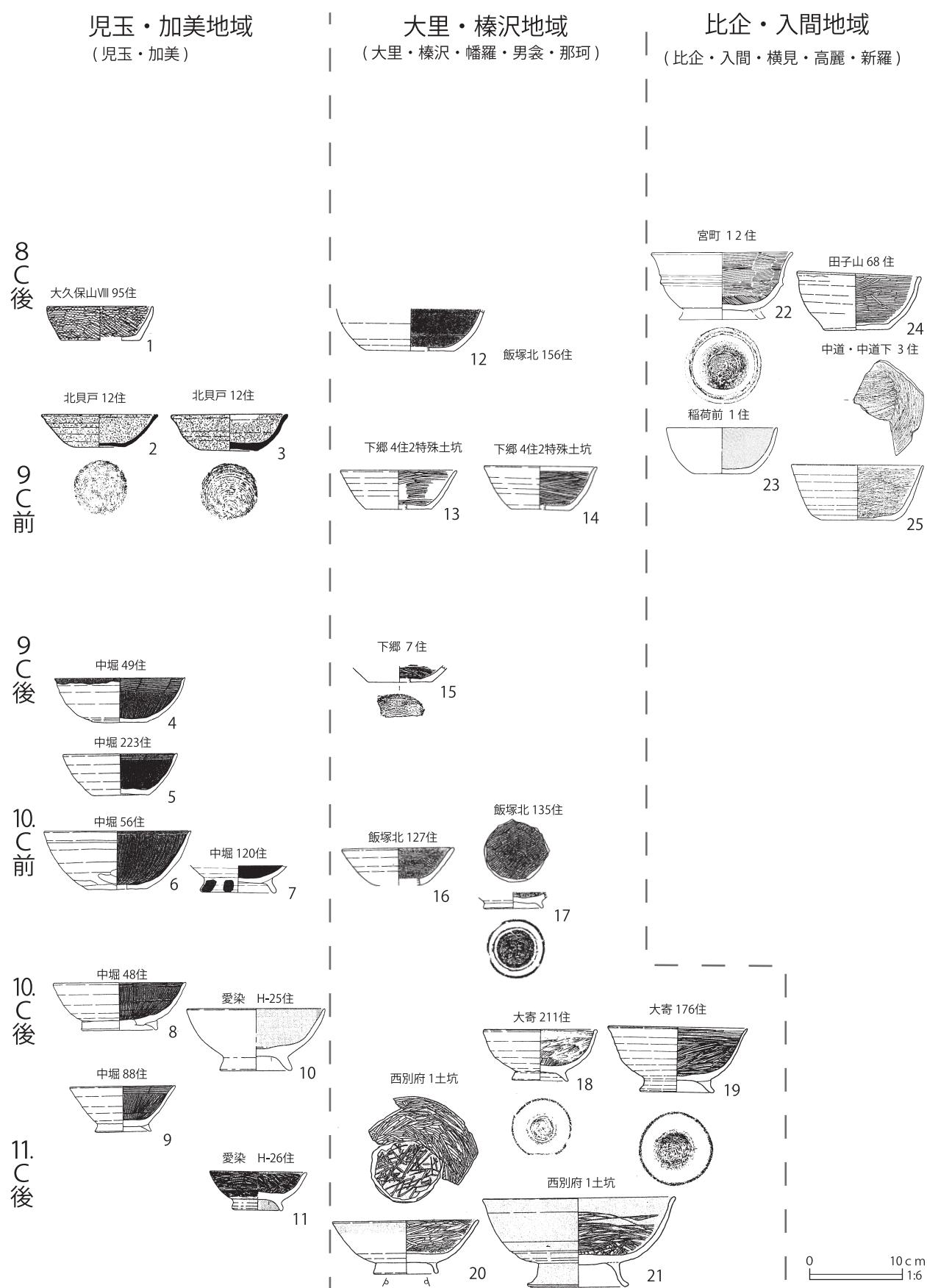
#### （1）出現の時期

8世紀代の主な黒色土器は坂戸市の稻荷前遺跡A区と宮町遺跡、深谷市の熊野遺跡などから出土したものと少ない。特に宮町遺跡出土の黒色土器は佐波理塊を模倣したもので、金属器を模倣したものと考えられる。埼玉県内における黒色土器は

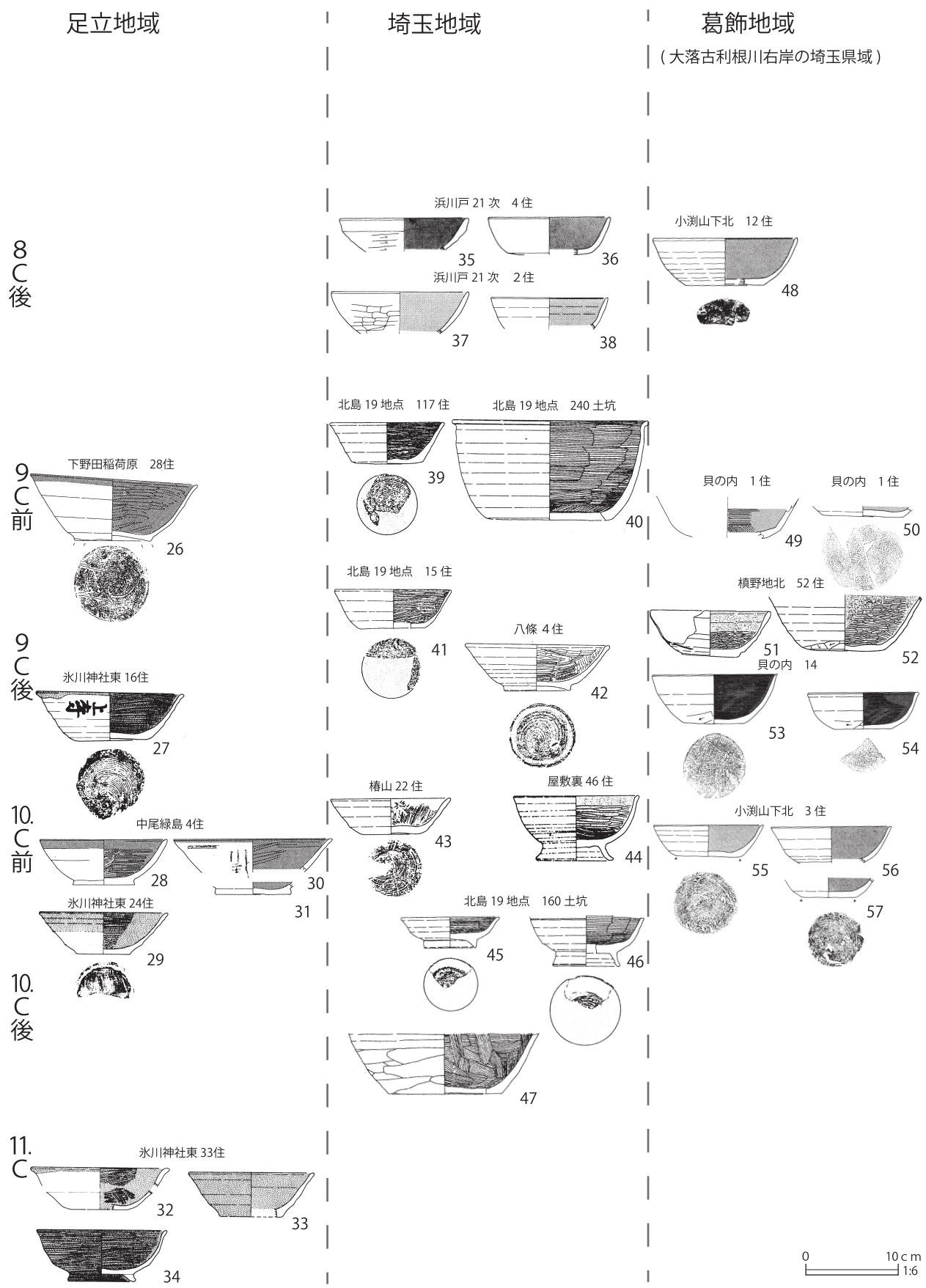


1 愛染遺跡	33 下田町遺跡	65 前領家遺跡	95 北島遺跡	127 陣屋遺跡	159 多摩 NT №939 遺跡
2 田中前遺跡	34 新ヶ谷戸遺跡	66 大山遺跡	96 諏訪木遺跡	128 伊興遺跡	160 多摩 NT №243・244 遺跡
3 中驅遺跡	35 樋の上遺跡	67 土呂陣屋跡	97 前中西遺跡	129 若宮八幡神社遺跡	161 多摩 NT №327・329・330 遺跡
4 秋山諏訪平遺跡	36 中平遺跡 (B-22 号遺跡)	98 古宮遺跡	130 武藏國府関連遺跡	162 多摩 NT №960 遺跡	
5 神原遺跡	37 沼下遺跡	68 水川神社東遺跡	99 愛宕通遺跡	131 武藏國分寺跡	163 木曾森野遺跡
6 阿知越遺跡	38 用土前峯遺跡	69 今羽丸山遺跡	100 築道下遺跡	132 武藏台遺跡	164 忠生遺跡 A 地区
7 雷電下遺跡	39 如意遺跡	70 東北原遺跡	101 下崎玉通南遺跡	133 東耕地遺跡	165 川島谷遺跡
8 金佐奈遺跡	40 反町遺跡	71 根切遺跡	102 馬場裏遺跡	134 竪町遺跡	166 すぐじ山遺跡
9 久下東遺跡	41 西浦遺跡	72 御藏山中遺跡	103 原遺跡	135 台の下遺跡	167 №16 遺跡
10 塔頂遺跡	42 谷ツ遺跡	73 寿能泥炭層遺跡	104 屋敷通北遺跡	136 竜ヶ峰遺跡	168 中郷遺跡
11 大久保山遺跡	43 中井遺跡	74 水割土堀の内遺跡	105 ハツ島遺跡	137 上つ原遺跡	169 小野田遺跡
12 烏森遺跡	44 宮前遺跡	75 大久保領家片町遺跡	106 米の宮遺跡	138 東寺方遺跡	170 美山町赤根遺跡
13 川向遺跡	45 稲荷前遺跡 (A 区)	76 大崎東新井遺跡	107 星敷裏遺跡	139 下石原遺跡	171 時田遺跡
14 北貝戸遺跡	46 宮町遺跡	77 駒形南遺跡	108 茂手木遺跡	140 中耕地遺跡	172 中里中里塚上遺跡
15 木部原遺跡	47 山田遺跡	78 和田北遺跡	109 長竹遺跡	141 上布田遺跡	173 西台煙不動坂遺跡
16 宮ヶ谷戸遺跡	48 八幡前・若宮遺跡	79 下野田稻荷原遺跡	110 花崎遺跡	142 多摩 NT №178 遺跡	174 田端西台通遺跡
17 滝ノ沢遺跡	49 光山遺跡群	80 中尾緑島遺跡	111 水深遺跡	143 多摩 NT №799 遺跡	175 江古田遺跡
18 大寄遺跡	50 花見堂遺跡	81 中野田島ノ前遺跡	112 御林遺跡	144 船田遺跡	176 道灌山遺跡 E 地点
19 宮西遺跡	51 加能里遺跡	82 東裏遺跡	113 椿山遺跡	145 多摩 NT №424 遺跡	177 四葉地区遺跡
20 熊野遺跡	52 新井原遺跡	83 A-147 遺跡	114 飯塚原地遺跡	146 多摩 NT №894 遺跡	178 志村遺跡 第 6 地点
21 中宿遺跡	53 新堀遺跡	84 宿宮前遺跡	115 府内三丁目遺跡	147 多摩 NT №436 遺跡	179 前野田向遺跡 第 9 地点
22 塚東遺跡	54 東の上遺跡	85 天神山遺跡	116 釣上碇遺跡	148 多摩 NT №107 遺跡	180 女塚貝塚
23 森脇遺跡	55 柳野遺跡	86 上台遺跡 B 地点	117 大道遺跡	149 多摩 NT №533・534 遺跡	181 三荷座前遺跡 第 2 地点
24 飯塚北遺跡	56 お伊勢山遺跡 (七郷神社裏遺跡)	87 八木本遺跡	118 八條遺跡	150 多摩 NT №839・840 遺跡	182 上麻生日光台遺跡
25 鶴ノ森遺跡	57 城山遺跡	88 八木崎遺跡	119 八木崎遺跡	151 多摩 NT №241 遺跡	183 敷根不動原遺跡
26 菅原遺跡	58 田子山遺跡第 93 地	88 合道高木前遺跡	120 浜川戸遺跡	152 下宅部遺跡	184 (No.11) 受地だいやま遺跡
27 下郷遺跡	59 中道・中道下遺跡	89 東本郷台遺跡	121 球内 14 号墳	153 南広間地遺跡	
28 宮ヶ谷戸遺跡	60 向山遺跡	90 宝泉寺遺跡	122 横野地北遺跡	154 神明上遺跡	
29 西堀遺跡	61 花ノ木遺跡	91 三ツ和遺跡	123 宮前遺跡	155 落川・一の宮遺跡	
30 西別府遺跡	62 峯前遺跡	92 前田字前前田第 1 遺跡	124 小渕山下遺跡	156 町米遺跡	
31 西別府祭祀遺跡	63 宮地遺跡	93 前田字六反畑第 1 遺跡	125 小渕山下北遺跡	157 王山上遺跡	
32 在家遺跡	64 新屋敷遺跡	94 毛長沼外瓦 A 遺跡	126 貝の内遺跡	158 大蔵春日神社北遺跡	

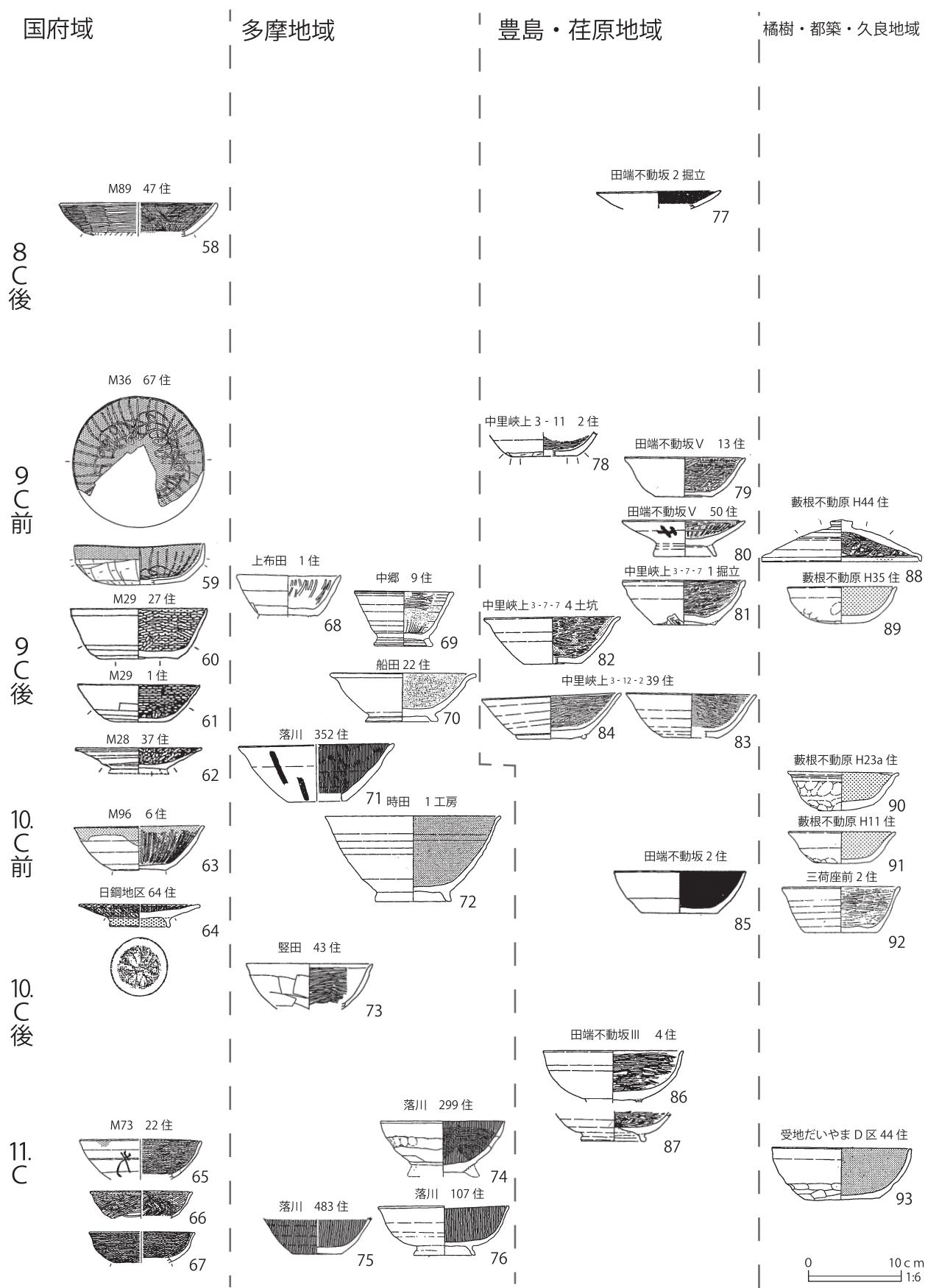
第2図 黒色土器分布図



第3図 遺物図版1 (加美・児玉地域、大里・榛沢地域、比企・入間地域)



第4図 遺物図版2(足立地域・埼玉地域・下総国葛飾地域)



第5図 遺物図版3（国府域、多摩地域、豊島・荏原地域、橋樹・都築・久良地域）

金属器の模倣からスタートし、その後に施釉陶器の影響を受けていくという傾向で捉えることができる。

8世紀段階には、比企・入間地域において少量認められ、なかには胎土に白色針状物質を含む南比企窯跡群の周辺で生産されたものも認められる。この段階の黒色土器生産には須恵器生産との関わりを想定できる。しかし、この地域は須恵器生産が引き続き行われ、黒色土器を含めたロクロ土師器などの酸化焰焼成の土器は定着しなかった。

末木は「北武藏には8世紀後半代には黒色処理技術の伝統はなかったことから、他地域からの技術伝授と考える方が妥当であろう」と想定している（末木1999）。

## (2) 出土状況の傾向

出土状況の傾向としては、黒色土器が主体を占めるような出土状況はみられず、竪穴住居跡から出土する点数で最も多いパターンは1点のみという事例が多く、逆に最もまとまって出土した事例でも4点程度であり、あくまでも客体的な状況にあるといえ、土器組成の主体を占める状況ではない。

9世紀後半から10世紀にかけての黒色土器は施釉陶器と共に伴する例が増えてくる。緑釉陶器や灰釉陶器は主に貴族層や官人層、富裕層が消費し、彼らの居宅と推定される遺跡からの出土が多い一方で官衙の中核部からの出土は少ない。これはこのような施釉陶器の主な消費は公的な場ではなく私的な奢侈品であると理解される。尾野善裕は緑釉陶器の出土状況からこのような様相を想定している（尾野2002）。

そこで9世紀後半以降の黒色土器がこのような奢侈品としての施釉陶器と共に伴して出土することの意味について検討する。

児玉郡上里町に所在する中堀遺跡の第4号掘立柱建物跡は、大量の食膳具を保管していたま

火災によって倒壊しており、ここから食膳具を中心とした遺物が出土している。これらの遺物はまとめて保管されていた一括性の高い遺物群といえる。時期は9世紀第IV四半期に位置付けられる。ここからは多くの食膳具が出土しており、土師器、須恵器が100点以上、黒色土器は15点、灰釉陶器が21点、緑釉陶器が3点している。土師器の量が圧倒しているが、施釉陶器類と同程度量の黒色土器が出土している。土師器、須恵器と黒色土器、施釉陶器では出土量が桁違いであり、これらの食膳具はセット関係にあったものではなく、まとめて保管されていたものといえる。

熊谷市の北島遺跡においては、第19地点から施釉陶器の出土が多く出土している一方で、第1地点や第5地点、第25次調査区といった遺跡の西側からの施釉陶器の出土は少ない。それに比例するように黒色土器の出土も少なく傾向にも違いが認められる。

武藏国の東端に位置する春日部市の八木崎遺跡は8世紀前半には、下総国、常陸国の須恵器や利根川水系の土師器がみられ、8世紀中葉になると、土師器主体から須恵器主体へ移り、南比企窯跡群や三和窯跡群・新治窯跡群の製品が、積極的に消費されるようになった。8世紀後半には下総地域の製品が多くなり、利根川水系の土師器杯や新治窯跡群の杯類が見られなくなり、9世紀前葉に黒色土器やロクロ土師器が増加する。

## (3) 少数資料の事例について

集成資料の圧倒的多数は内面を黒色処理したA類となるが、内外面に黒色処理を施しているB類も若干ながら出土している。埼玉県域においては、黒色土器全体の総数が1,310点であったため、約5.3%という希少性である。時期は8世紀代にも少量みられるが、9世紀代に多く10世紀にやや減少するが11世紀中頃までみられる。

そのなかでB類が最も多く出土している遺跡は足立地域の氷川神社東遺跡で11点、次いで児

玉・加美地域の中堀遺跡と埼玉地域の屋敷裏遺跡でそれぞれ7点、大里・榛沢地域の大寄遺跡で6点となっており、この4遺跡だけで31点と45%近い点数が出土していることになる。その他の遺跡では1点～3点程度出土している遺跡がみられる。

氷川神社東遺跡の性格としては、近隣に氷川神社が所在する立地や口琴2点、金銅製仏像、「上寺」記載墨書き土器、灯明皿と考えられる油付着土器が出土しており、氷川神社と関連する宗教的・祭祀的な性格が想定される。屋敷裏遺跡も氷川神社東遺跡に次いで国内3例目の口琴が出土するなど、特殊な性格を有した集落といえよう。中堀遺跡や大寄遺跡も地域の拠点的な集落に位置付けられることから、B類は一般集落で求められていた土器ではなく、やや特殊な環境下で求められていた土器だといえる。東京都側においても府中市の武蔵国府関連遺跡や日野市・多摩市の落川・一の宮遺跡において多くみられる。

また、内面ミガキ調整の方向については、報告書上から確認できた範囲で、武蔵国内から出土した黒色土器の大半はI類とした横方向のミガキ調整を施されてタイプであるが、少数だがII類が出土している。II類が出土している遺跡は、中堀遺跡、氷川神社東遺跡、武蔵国府関連遺跡、多摩市の上つ原遺跡と隣接する竜ヶ峰遺跡、落川・一の宮遺跡、日野市の山王上遺跡、八王子市の多摩ニュータウンNo.241遺跡、多摩ニュータウンNo.436遺跡、多摩ニュータウンNo.799遺跡、調布市の上布田遺跡、北区の田端不動坂遺跡である。

武蔵国府は無論のこと、中堀遺跡、氷川神社東遺跡、落川・一の宮遺跡は内外面黒色処理されたB類も出土しているやや特殊な性格を有した遺跡で、上つ原遺跡は前述の通り赤彩球胴甕が出土しているほか、甲斐型土器が出土しているなど甲斐国や東北地方との関わりも想定される遺跡である。

後述するが、甲斐国はII類の出土が多い地域である。多摩地域では、武蔵国府と調布市の上布田遺跡以外は八王子市域と日野市域においてみられるという傾向にあり、豊島・荏原地域の豊島郡で1点みられた。

## 5 他地域との比較

以上、武蔵国の傾向を踏まえたうえで次に他の地域との比較を行うが、全国規模で集成は行えなかつたので、主だった遺跡の調査成果や先学の研究から傾向をみるとこととする。

### (1) 関東

まず、関東地方の他地域について概観する。

#### ①上野国

前述の桜岡正信による研究がある（桜岡1988）。群馬県内を新潟県寄りの山間部にあたる利根・沼田地域、埼玉県・長野県寄りの利根西地域、栃木県寄りの利根東地域の3つに分けて検討を行っている。

主な成果を取り上げると「黒色土器は、利根・沼田地域に比較して利根西・利根東地域に多くみられる傾向がある」、「黒色土器は、遅くとも9世紀前半までには出現し、9世紀後半～10世紀前半に器種分化し、さらに大・中・小に量目分化し11世紀に継続する」、「黒色土器は、出現段階から消滅するまで常に量が少なく、客体的存在であった可能性が高い」などという分析結果を示している。出現時期については、8世紀代に遡る資料も存在するが、大部分が9世紀代以降となっている。

いくつかの遺跡を個別に取り上げて出土傾向をみてみると、利根西地域に含まれる富岡市の南蛇井増光寺遺跡の黒色土器を実見したが、I類が主体を占めていたが、II類も少量認められた。また、伊勢崎市の上植木光仙房遺跡の資料も実見したが、同様にI類が主体を占めていたが、III類としたミガキによって花弁文様が施されたものが確認

された。花卉文様が施されたタイプは上野国でも出土量は少なく、武藏国内では確認されていない。利根東地域に含まれる太田市の鹿島浦遺跡や大道東遺跡からは8世紀前半代に位置付けられる黒色土器が出土している。なお、鹿島浦遺跡からは2点、放射状にミガキ調整を施すⅡ類に属するタイプが確認されている。

#### ②下野国

下野国での黒色土器について田熊清彦、梁木誠によると、8世紀中頃から少量みられるようになり、9世紀中頃までは主体とはならないが、9世紀後半から10世紀前半には主体を占めるようになる。この最も盛行する時期は須恵器が減少する時期にあたるという。そしてその後、10世紀後半には減少する傾向にあるようである（田熊・梁木1990）。

下野市の下野国府跡第2・3次調査区からは多くの施釉陶器が出土しており、緑釉陶器に限定すれば大半がこの調査区からの出土となっている。この下野国府跡においての黒色土器は一定量認められる。ミガキ方向は大多数がⅠ類となる横方向のミガキであるが、少量であるが、内面に黒色処理が確認できずミガキ調整が施されているものも含めてⅡ類となる放射状のミガキ調整のものも認められる（栃木県教育委員会編1988）。

また、日光市の日光男体山山頂遺跡から多くの施釉陶器とともに黒色土器が出土している。下野国における施釉陶器の出土量は下野国府跡や日光男体山山頂遺跡などの特殊な遺跡を除くとあまり多くない（田中1994、田尾2015）。対して黒色土器は9世紀後葉頃から10世紀前半がピークとなり多く出土している。

内面のミガキ調整については、横方向にミガキ調整を施すⅠ類が主体を占める。

#### ③常陸国

常陸国での黒色土器の推移は、概ね8世紀後半頃に出現した後、9世紀代にかけて増加してい

き、10世紀中頃にむかって減少していく傾向にある（佐々木1998・2007）。内面ミガキ調整はⅠ類が主体を占める様相にある。

#### ④上総国・下総国

上総国、下総国における黒色土器については、 笹生衛がまとめている（笹生1990）。それによると、上総国、下総国においては8世紀第3四半期頃には出現しており、上総西部、下総北部～中央部にかけては須恵器を補完する形で出現し、下総東南部～上総北東部、下総北東部にかけては須恵器と赤彩ロクロ土師器を補完する形で出現するという。

9世紀前半代に須恵器の生産量が落ちる上総西部での黒色土器の比率は30%代と多く、9世紀後半代にもこの比率を維持しているという。それに対し、下総東南部～上総北東部での黒色土器の比率は10%台に留まる。下総北部についても同様の傾向にあり、黒色土器の比率が増加は9世紀後半になるという。

下総国葛飾郡は大部分が現在の千葉県に属するが、一部の地域が埼玉県や東京都、茨城県に属している。大落吉利根川左岸に位置する春日部市の小渕山下遺跡、小渕山下北遺跡、陣屋遺跡、貝の内遺跡、幸手市の楨野地北遺跡は笹生の地域区分でいう下総北部に該当する地域であるといえる。これらの遺跡についても9世紀後半頃に黒色土器が増加すると捉えられる。

常総地域における黒色土器の内面ミガキ調整はⅠ類が主体を占める様相にある。常総地域では、8世紀後半以降9世紀代にかけて、須恵器生産が減少する時期に一時、黒色土器が土器組成の主体を占める時期がある。

#### ⑤相模国

相模国府では9世紀前半頃～中頃まで甲斐型土器が搬入されていたが、代わって9世紀後半には灰釉陶器の搬入が増加する（田尾2003）。

また、同時期になると黒色土器もみられるよう

になる（依田 2015）。総じて黒色土器量は少ない地域といえる。

## (2) 中部

東海道に属する尾張国、三河国、遠江国、駿河国、伊豆国での黒色土器の出土量は少ない。これらの地域は須恵器や施釉陶器の主要産地を抱える卓越地域及びその隣接地であったことが要因の一つといえるのだろう。東山道に属する美濃国も黒色土器の量は多くなく、東海道諸国と同様の要因を考えられる。

### ①信濃国

信濃国は比較的、黒色土器の出土量が多い地域であるといえる。松本平に位置する塩尻市の吉田川西遺跡は筑摩郡に置かれた埴原牧に関わり、豊富な施釉陶器が出土しているなど富を蓄えた集落と想定されている（原 2010）。

吉田川西遺跡では、8世紀後半に黒色土器が出現し、9世紀代にかけて増加し、9世紀後半にピークを迎える。9世紀末～10世紀初頭頃から減少していく。吉田川西遺跡については、黒色土器をいくつか実見したが、報告書上からは判別できない内面のミガキ方向の多くが放射状にミガキ調整を施すⅡ類に属するタイプであったことを確認した。善光寺平に位置する長野市の南宮遺跡は更級郡斗女郷の中心的な集落とみられている。7世紀末から須恵器が食膳具の主体であったが、8世紀末から黒色土器が増加し、9世紀代に組成の主体を占める。しかし10世紀代には黒色土器が減少し、土師器が主体となっていく。また、9世紀中葉以降にヘラミガキが粗雑化していく。

### ②甲斐国

甲斐国の黒色土器として古い事例は韮崎市の宮ノ前遺跡から出土した8世紀第3四半期に位置付けられているⅢ期のものがある。

甲斐国の黒色土器は甲斐型土器の枠組に含まれる甲斐型黒色土器と、平野修が山梨系黒色土器

と定義づけた從来、信濃国からの影響によるものと捉えられていた黒色土器が存在する（平野 2017）。

甲斐型黒色土器の特徴は、甲斐型土器と同様の赤褐色粒を含む胎土を用い、内面に暗文を施すものに、ミガキ調整と黒色処理を加えたものである。

山梨系黒色土器は甲斐型黒色土器とは胎土が異なり、内面にミガキ調整を施すが、口縁部付近は横方向で見込み付近は放射状にミガキ調整を行うものがみられる。

山梨系黒色土器は巨摩郡に属する地域において多く出土する傾向にあると指摘され、信濃国からの影響と捉えられていた。北巨摩地域出土の黒色土器については渡邊泰彦も考察を行い、長野県の黒色土器は「ヘラミガキが粗雑化するする9世紀中葉以前の黒色土器は北巨摩出土のものと共通点が認められた」としている（渡邊 1999）。

巨摩郡に属する主な遺跡として、前述した韮崎市の宮ノ前遺跡と南アルプス市の百々遺跡が挙げられる。宮ノ前遺跡の黒色土器を時期別に内面ミガキ調整をみると、古い時期にはⅠ類がみられ、9世紀代以降になるとⅡ類が増加する傾向にある。また、百々遺跡は釜無川以西に位置する大規模な遺跡で、100体を越えるウマやウシの骨が出土し、御牧との関わりが想定されている。黒色土器の出土量は多くⅡ類が主体を占める。

## (3) 東北

陸奥国は古墳時代以来の黒色土器卓越地域であるが、いわゆるロクロ土師器が導入されるのは8世紀後半頃である。北上川流域などでは胆沢城や志波城の造営や瀬谷子窯跡など須恵器窯の開窯と軌を一にする。

諸説あるが、8世紀後半から9世紀初頭にかけての征夷戦争時に多賀城周辺など東北地方へ征討軍として大量に派遣してきた兵士らの食器を賄うために、いわゆるロクロ土師器が須恵器の代

用品として用いられたとする見方もある（吾妻2004、仲田1994）。

その後、多賀城跡周辺では10世紀代になると須恵系土器と呼ばれる非黒色処理の土器が表れる。多賀城跡では10世紀代になると須恵系土器と呼ばれる黒色処理されない土器が現れる。

一方の出羽国では陸奥国側よりも早く、8世紀末から9世紀前半にかけての時期に赤褐色土器と呼ばれる非黒色処理の土器が現れる。東北地方では対照的に黒色処理の施されない土器が求められるようになる。

#### (4) 西日本

平城京における黒色土器は『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告 長屋王邸・藤原麻呂邸の調査』に「畿内における黒色土器は、平城宮土器Ⅱに属する薬師寺SE037出土土器、平城宮土器Ⅲに属する左京四条四坊九坪出土土器の例があるが、平城宮土器Ⅳ以降に普遍化する。」とある。このことから平城宮土器Ⅱ期の段階となる730年を前後する8世紀前葉の時期には少ないながらも確認され、765年となる8世紀後葉以降に増加している（奈良国立文化財研究所編1995）。

また、7世紀～8世紀代にかけて奈良県高市郡明日香村の石神遺跡、奈良市の平城京左京四条四坊十坪、滋賀県守山市の横江遺跡、大門遺跡、甲賀市の下川原遺跡、香川県坂出市の讃岐国府跡、さぬき市の森広遺跡などから東北地方由来の栗圓式とされる土師器が出土しており、これらの土師器は俘囚に関わる可能性が指摘されているが、いずれも単発的なもので終わっている。

平安京においては9・10世紀代の皇族や貴族層の邸宅比定地が発掘調査により明らかになっている場所がいくつかみられる。それらの中には宴会などによって使用されたのちに廃棄されたとみられる遺物群が確認されている事例もみられ、そこには黒色土器も含まれている。一例として、平

安京右京三条一坊六町からは、右大臣藤原良相の邸宅である西三条第（百花亭）跡が確認されている（京都市埋文化財研究所編2013）。ここからは9世紀後半に池（池250）へ投棄されたとみられる土器群が検出されている。なかには平仮名が記された墨書き土器がみられるなど当時の貴族層の暮らしぶりがうかがえる好資料といえる。この池250から出土した土器群9世紀後半の時期に継続して池に投げ込まれていたものとみるべきであり、出土土器の種別割合としては土師器が圧倒的に多いが、黒色土器も含まれている。

九州北部では、福岡県久留米市の筑後国府跡第89次調査、京都郡苅田町の黒添・赤木遺跡、福岡市の雑飼隈遺跡、佐賀県神埼市の浦田遺跡などから東北系とされる内面を黒色処理されている土師器が出土している（松村2013）。

大宰府跡における黒色土器の初現は8世紀末であり、9世紀初頭以降に施釉陶器に類似する高台付皿などが出現する。

西日本地域における内面のミガキ調整は、確認出来た範囲では横方向のI類が主体となると思われる。都城と九州北部以外の地域では、9世紀後半以降に黒色土器の出土量が増加する（森1990a）。その後、内外面黒色処理されたB類を経て瓦器へ至る地域が現れる。

#### (5) 小結

以上、東日本地域を中心に傾向をみてきたが一貫して黒色土器が少ない地域や9世紀代に増加し10世紀代には減少する地域、10世紀代に増加する地域、黒色処理の施されない土器が求められる地域など、地域ごとに傾向を認めることができた。少ない地域は須恵器や施釉陶器が卓越した地域であり、微視的な視点との比較になるが比企・入間地域で黒色土器が少ないという状況と類似する。

## 6 黒色土器の消長と展開

### (1) 黒色土器の出現

前述の通り、武藏国における8世紀代の主な黒色土器は、坂戸市の稻荷前遺跡A区、宮町遺跡、深谷市の熊野遺跡などから出土したものなどと少ない。

坂戸市の宮町遺跡から出土した黒色土器は、8世紀後半頃前後に位置付けられ前述の通り、佐波理の稜塊を模倣したものであり、胎土に白色針状物質が含まれていることから、南比企周辺でつくられたものの可能性もある。また、志木市の田子山遺跡第93地点においても胎土に白色針状物質を含む黒色土器が出土しているが、報告書では南比企窯跡群で生産している製品とは異なることから他地域の製品と想定されている。

宮町遺跡は「路家」と書かれた墨書き土器や棹秤と推定される石製の錘や鉄製留金具が出土し物資の集積や管理にかかる遺跡と想定される。また、稻荷前遺跡A区は官人居宅か郷家関連の遺跡、熊野遺跡は榛沢郡家にかかる遺跡であり、いずれも官的な遺跡といえる。

上野国における黒色土器で古い段階のものとしては、太田市の楽前遺跡、鹿島浦遺跡などから出土したものが8世紀前半代に位置付けられている。これらの遺跡は東山道駅路と接する遺跡である。また、推定上野国府域にあたる元総社小学校校庭から出土した黒色土器の壺蓋と盤は8世紀中頃の時期に位置付けられている（神谷2015）。

常陸国においても国府関連施設の鹿の子遺跡SX146から出土した有台壺2点とこれらとは組み合わない蓋1点である（渥美2018）。

他地域の様相としては、越中国の黒色土器について内田亜紀子が6世紀～8世紀と9世紀～11世紀の2時期に分けて検討を行っている（内田2002、2003）。そこで越中国における口クロを用いた黒色土器の初現は8世紀中葉頃に呉西地域（高岡・射水）で金属仏器模倣として現れ、9

世紀代以降に各地で出土するようになるとしている。

8世紀代の黒色土器は国府周辺や郡家、官道に近い地域から出土する傾向がみられ、金属器模倣のものがある点などから、前述したように森隆（森1995）が定義した奈良時代に都城で出現し、定型化した後、都城の影響下において平安時代以降の各地で生産されたという土器は、平安時代に至る前、奈良時代の段階においてすでに地方で受容されていたといえる。

このように奈良時代に官衙周辺や官道付近でみられるようになり、その後8世紀後半から9世紀にかけて広がっていく。

### (2) 黒色土器の生産と機能

10世紀代頃の黒色土器には器形が同一であるが黒色処理されずミガキのみが施されている土器がある。こういった土器と黒色土器との関係性としては桜岡正信、佐々木幹雄両氏の黒色処理方法の研究（桜岡・佐々木1992）によって捉えることができる。すなわち、土器の黒色処理化は一次焼成である必要はなく、二次焼成によって黒色処理を施すことが可能であり、仮に黒色部分が剥げたりしても二度三度と再処理が可能であるということが実験的な研究成果を挙げられている。そこから想定されていることは一次焼成による土器生産の当初から黒色処理する必要は決してなく、必要に応じて黒色処理を施して黒色土器とすることが可能ということである。また、内面のみに黒色処理を施すだけでなく、内外面に黒色処理を施すことも同様に可能であるという。このことから当初から黒色という色彩に意味合いを求められていたのであるならば、内外面を黒色化することも可能であるが、それを積極的に行うことはされていない。

武藏国内においてはそれぞれの地域によって黒色土器が普及する時期に違いが認められる。なかでも、8世紀後半から9世紀にかけて普及してい

くパターンと9世紀後半以降10世紀にかけて普及していくパターンがあり、これらは別の要因によるものと捉えられる。

武藏国内において黒色土器の出現が早かったのは、比企・入間地域であるが、この地域では8世紀後半以降も須恵器のシェアが衰えることなく黒色土器に代用を求める必要がなかったといえる。

比企・入間地域の様相はやや特殊な状況といえ、東関東を中心とした多くの地域では8世紀後半頃当初の黒色土器は須恵器の代用として普及したロクロ土師器の一類型として共に普及した。しかしロクロ土師器の全てが黒色処理されてはいない。これは各々の食膳具に盛り付ける食事に関わると想定できる。

すなわち透水性の低い須恵器の代用として透水性の低さが求められたためと考えられ、乾物を盛りつけるなどの食膳具には低い透水性は必要なく、透水性の低い土器は必要な数だけ求められていたためという可能性である。

しかしながら課題もある。前述の通り、菅原正明の研究によると、黒色土器の透水性が高い要因は黒色処理によるものではなく、内面に認められるミガキによるものとしている（菅原 1989、1995）。透水性の低さに必要なのはミガキ調整であって、黒色処理は必須の処理ではない。この点は今後の検討課題といえる。

### (3) 黒色土器と施釉陶器

9世紀後半から10世紀にかけて普及していく段階では、施釉陶器の模倣を行うようになっていく。渥美賢吾は常陸国における黒色土器の有台皿に着目し、施釉陶器の生産や輸送コストの面から釉薬や色彩を求めなければ、在地で生産された土器のほうがコスト面での合理性があるとし、黒色土器普及の一因とみている（渥美 2018）。9世紀後半以降、東国へ供給された施釉陶器が猿投窯系の製品から東濃諸窯産の製品へと転換される過

程で、これまで東海道諸国及び海路経由で搬入されていた製品が東山道諸国の陸路経由で搬入されるに至り、輸送コストが嵩むようになった可能性は十分想定される。その点は常陸国よりも施釉陶器の生産地に近い信濃国では他地域よりも多く東濃諸窯産の製品が搬入されていることからもわかる。

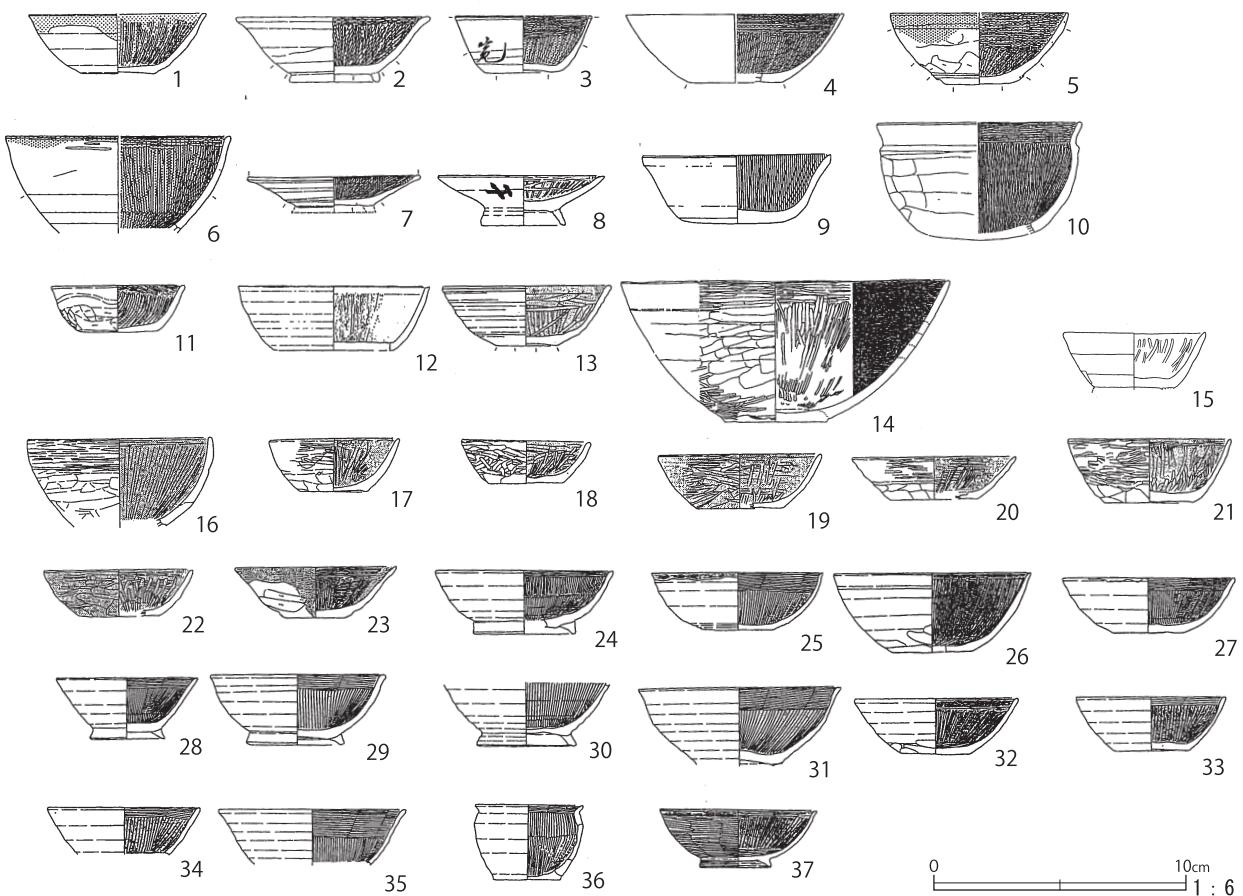
その信濃国で9世紀代に須恵器に置き換わるよう黒色土器が増加する状況はまさに黒色土器が須恵器の代用として普及したことによるものであろう。その後10世紀代に緑釉陶器のような花弁を模したミガキが施されるものが現れる。いずれにせよ10世紀代にかけて黒色土器が普及していく要因としては施釉陶器との関わりが高い。この現象は前段階において須恵器の代用品として普及したのとは異なり、施釉陶器の代用品として求められ、さらには食膳具としてのセット関係を構成したことによると解される。この現象は、従来、黒色土器の出土量がほとんどなかった相模国でも国府域において施釉陶器の出土量が上昇していく時期に黒色土器も一定量みられるようになる点からもうかがえる。

それとは対照的に常陸国は施釉陶器の出土量が少ない地域であり、食膳具としてのセット関係を構築するまでは至らず黒色土器を代用する頻度が高かったという事情が想定される。

西日本の多くの地域では、9世紀後半以降に黒色土器の出土量が増加する。その後、内外面黒色処理されたB類を経て瓦器へ至るとされているが、菅原正明の研究成果に見られたように瓦器がミガキを施された黒色土器よりも透水性が低いのならば機能性よりも黒色という色彩に重きを置かれたといえる。しかし東国地域では瓦器への転換が図られることはなかった。

### (4) 内面ミガキ調整についての予察

武藏国において出土したミガキ調整を確認できた黒色土器のほとんどがI類とした横方向のミガ



1～7：武藏国府関連遺跡 8：田端不動坂遺跡 9～10：落川・一の宮遺跡 11：山王上遺跡 12：多摩ニュータウンNo.799遺跡  
13：多摩ニュータウンNo.241遺跡 14：多摩ニュータウンNo.436遺跡 15：上布田遺跡 16：上つ原遺跡 17～22：竜ヶ峰遺跡  
23：氷川神社東遺跡 24～37：中堀遺跡

第6図 黒色土器の内面ミガキII類集成図（武藏国）

キ調整を施すものであった。そのなかで、II類とした放射状にミガキが施されるタイプは、武藏国では児玉・加美地域の中堀遺跡と多摩地域で若干認められ、足立地域と豊島・荏原地域で各1点、埼玉地域や橘樹・都筑地域、下総国に属する葛飾地域といった東部地域ではみられなかった（第6図）。ともすれば児玉・加美地域や多摩地域の八王子・日野周辺という武藏国西部に多くみられる傾向にあるといえる。

同様の傾向は、上野国でも捉えられ利根西地域ではII類がやや多く確認された一方、利根東地域では少ないという状況にある。また、上野国では、III類とした花弁文様を施すものもみられたが、武藏国では確認できなかった。

周辺地域では、常陸国や下総国の常総地域ではI類が多く確認され、信濃国や甲斐国の甲信地域でII類が多く地域差がうかがえ、武藏国は周辺国の影響を受けて東西での差異が生じた可能性が想定される。

この問題は、今後より広範囲に資料を実見して傾向を見出す必要があるため、本稿ではこれ以上立ち入らず、今後の課題とする。

## おわりに

### (1)まとめとして

以上、これまでのことを簡潔にまとめると、現状、黒色土器は古墳時代の土師器にみられた黒色処理されたものとは直に継続しないという説が大

勢を占めている。

8世紀前半代に平城京に黒色土器が現れ、一部の地方官衙や官道周辺へ波及する。8世紀後半かその直前には、金属器か金属器を模倣した須恵器を模倣するように出現するが出土量は限定的である。9世紀代に須恵器の量が減少するとロクロ土師器の類型として黒色土器が増加する地域がある。対して、一部の須恵器生産が衰えない地域では普及しない。このことから須恵器の代用品としての性格が想定される。黒色処理を施す目的は、須恵器の代用品という観点からは、透水性の低さを求めていた可能性が想定される。

9世紀後半から10世紀にかけては、施釉陶器を模倣したような器形のものが増加する。施釉陶器とセット関係を構成するか、施釉陶器の代用品としての模倣品かは、地域によって異なる可能性がある。内面のミガキ方向は、常総地域ではI類とした横方向が多く、甲信地域ではII類とした放射状の方向が多い。武藏国や上野国などの周辺地域は東西でその影響を受けている傾向がある。

## (2) 黒色土器の系譜

最後に今後の課題として、黒色土器の系譜を東地方に辿るならば、時期ごとの段階を捉える必要があると考えられる。

8世紀前半頃に平城京において出現したタイプの黒色土器は、おそらくとも8世紀後半代までには地方官衙周辺にもたらされている。その後、8世紀後半頃～9世紀初頭頃に各地域において黒色土器の量が増加していく。

西日本では都城と九州北部以外の地域において黒色土器が出現する時期は9世紀後半からであり、都城と九州北部が先行する状況にある（森1990a）。西日本のなかでもこれらの地域は衛士や防人として東国を介し東北地方と関わりを持つ機会の多い地域と言える。8世紀後半は征夷戦争が本格化し俘囚・夷俘の移配が増加する時期であるが、同時に征討軍や鎮兵として東国の人々が東

北地方へ派遣されていた時代もある。

前述した通り、8世紀後半から9世紀初頭にかけての征夷戦争の際に大量に派遣されてきた兵士らの食器を賄うためにいわゆるロクロ土師器が須恵器の代用品として導入されたとする説があり（吾妻2004、仲田1994）、これらの土器は内面に黒色処理されたものである。征討軍に参加した兵士やそれを支えた技術者などは、多賀城やその周辺において供給された黒色土器を使用し、あるいは生産に従事していた可能性も想定される。そして彼らが任期を終え故郷に帰国した後にロクロ整形され内面にミガキを施し黒色処理した土器を模倣したという可能性も想定できよう。

8世紀後半以降、9世紀代にかけて東北地方の土器生産に令制国側からの影響があったことは確かであり、彼らは東北地方へ技術をもたらしただけではなく、東北地方で得た知見を各地へフィードバックしたこともあるだろう。

当初、須恵器工人が取り入れた黒色処理の技法であるがその後、その技法が拡散しロクロ土師器とセットで黒色土器が広がるか、須恵器生産が継続するかは受容した地域によって異なる方向へ進む。このような須恵器工人が関わった可能性も想定される8世紀後半以降に確認された黒色土器は、ほぼロクロ（回転台）によって生産されている。

9世紀初頭、北上川流域に胆沢城や志波城、徳丹城といった城柵が造営されると須恵器窯が開窯されるとともに、土師器生産にもロクロが導入される。しかし当初、これらの須恵器やロクロ土師器を消費していたのは、城柵遺跡やそれらとの関わりが強い集落であり、それ以外の集落では未だロクロを使用しない伝統的な土器を消費していた（津島2013、2015）。東北地方において、9世紀という時期に律令国家との関わり具合が低かったといえる集落、すなわち「蝦夷の集落」では未だロクロを用いない土師器を使用しており、黒色土器を俘囚・夷俘に関連するものと位置付けるの

ならば、移配先においてもロクロを使用しない土器が出土して良さそうであるが、この段階において令制国内で出土する黒色土器はほぼロクロによって生産されたものであることから俘囚・夷俘に関連するという可能性については慎重な検討を要する課題といえよう。俘囚・夷俘のほかに兵士や須恵器工人といった人々が関与していたことも想定される。また、ミガキ調整の方向が横方向主体（I類）の黒色土器が多い東関東地域を中心とした関東地方と、放射状主体（II類）が多い甲信地域では、それぞれの故地が異なるという可能性も想定される。

以上、推論に推論を重ねるような内容となってしまったが、妥当性については今後の課題としておきたい。

また、今回は集成と、比較対象としての他地域の大まかな傾向に留まってしまい、個別具体的な様相や時期ごとの出土量の推移、地域ごとの傾向などの基本的な分析に至ることが出来なかった。今後の課題したい。

資料の熟覧にあたりましては、以下の組織の方々から御協力を賜りました。記して感謝申し上げます。（五十音順敬称略）

群馬県埋蔵文化財調査事業団 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 埼玉県立さきたま史跡の博物館 長野県立歴史館

註1 『「俘囚・夷俘」とよばれたエミシの移配と東国会』の資料集において、誤って坂戸市の稲荷前遺跡A区から出土した黒色土器と同じく坂戸市の宮町遺跡から出土した佐波理の稜塊模倣の黒色土器を取り違えて掲載してしまいました。正しくは佐波理の稜塊模倣の黒色土器が出土したのは宮町遺跡です。ここにお詫

びして訂正いたします。

註2 ロクロ土師器の用語については、適切ではないという見解がある（福田2017）。そのため、それぞれの報告書においてもさまざまな名称が与えられているが、本稿の中において表現を統一する必要があるため、便宜上ロクロ土師器の名称を使用している。また、黒色土器、内黒土器の名称については、内外面黒色処理されたB類を集成した関係上、内黒土器ではそぐわないため、黒色土器に統一した。

註3 集成の対象とする地域は埼玉県の全域、東京都と神奈川県の一部地域とする。東京都については、古代において下総国葛飾郡に属した葛飾区・墨田区・江東区・江戸川区は除外した。また伊豆諸島も古代においては伊豆国加茂郡に属していたと想定される。従って今回は伊豆諸島を含めた東京都の島嶼部も除外した。神奈川県については、橘樹郡（川崎市のはぼ全域・横浜市鶴見区・神奈川区・保土ヶ谷区・港北区の各一部地域）、都筑郡（横浜市都筑区・緑区・旭区・青葉区・港北区・保土ヶ谷区の一部・瀬谷区の一部・川崎市麻生区の一部）、久良郡（横浜市中区・西区・磯子区・金沢区・南区の大部分、港南区の一部）として取り上げる。神奈川県のそのほかの地域は相模国に属するため除外した。

註4 集成は報告書上で黒色土器・内黒土器の名称や黒色処理の記載や図上でのトーンなどから判断している。そのため、実際はミガキ調整のみで黒色処されていないものや黒色処理されているものが報告書上で示されていないものなどが含まれている可能性がある。また、筆者の見落としによる遗漏や誤認も含まれていると思われる。

## 引用・参考文献

- 吾妻俊典 2004 「多賀城とその周辺におけるロクロ土師器の普及開始年代」『宮城考古学』第6号 pp187-196
- 渥美賢吾 2018 「黒色磨研土器からみた常陸における古代土器の様式転換とその背景」『婆良岐考古』第40号 pp59-73
- 依田亮一 2015 「東国の官衙と土器—相模国のこと例を中心として—」『官衙・集落と土器1—官都・官衙と土器』 pp73-91
- 内田亜希子 2001 「任海宮田遺跡出土の黒色土器」『大境』 pp21-28
- 内田亜紀子 2002 「富山県の黒色土器—6～8世紀の県内資料を中心にして—」『富山考古学研究』紀要第5号 pp15-28
- 内田亜紀子 2003 「富山県の黒色土器(2) —9～11世紀の県内資料を中心にして—」『富山考古学研究』紀要第6号 pp47-56
- 小笠原好彦 1971a 「丹塗土師器と黒色土器」『考古学研究』18卷第2号 pp36-80
- 小笠原好彦 1971b 「丹塗土師器と黒色土器(2)」『考古学研究』18卷第3号 pp64-86
- 尾野善裕 2002 「平安時代における緑釉陶器の生産・流通と消費 尾張産を中心に」『国立歴史民俗博物館研究報告』第92集 pp35-57
- かながわ考古学財団編 2009 『湘南新道関連遺跡II』かながわ考古学財団調査報告 242
- 神谷佳明 2015 「元総社小学校校庭出土の黒色土器について」『推定上野国府 平成25年度調査報告』 pp71-75
- 京都市埋蔵文化財研究所編 2013 『平安京右京三条一坊六・七町跡』京都市埋文化財研究所発掘調査報告書 2011-9
- 桜岡正信 1988 「群馬県における内面黒色処理を施す土器の一侧面—ロクロ使用酸化焰焼成土器を中心として—」『古代集落の諸問題 玉口時雄先生古稀記念考古学論文集』 pp161-174
- 桜岡正信・佐々木幹雄 1992 「黒色土器の吸炭処理について—その実験的考察—」『古代』第94号 早大考古学会 pp243-257
- 佐々木義則 1998 「常陸におけるロクロ成形土師器坏の展開—古代久慈・那賀・信太の三郡を中心として—」『婆良岐考古』第20号 pp43-60
- 佐々木義則 2007 「茨城県における奈良・平安時代土器研究の現状」『考古学の深層』瓦吹堅先生還暦記念論文集 pp311-322
- 笹生 衛 1990 「房総における黒色土器の展開と終焉」『東国土器研究』第3号 pp71-86
- 佐藤俊祐 2012 「阿波における黒色土器碗の形態と分布について」『真朱』徳島県埋文化財センター研究紀要第10号 pp49-57
- 末木啓介 1999 「埼玉県における平安時代の黒色土器と土器生産について」『土曜考古』第23号 pp81-106
- 菅原正明 1989 「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第19集 pp167-308
- 菅原正明 1995 「瓦器・黒色土器の焼成方法」中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 田尾誠敏 2003 「四 生産と交易」『平塚市史 11下 別編考古(2)』平塚市 pp127-156
- 田尾誠敏 2015 「関東への灰釉陶器の流入状況と在地土器」『灰釉陶器生産における地方窯の成立と展開』第3回東海土器研究会 pp41-60
- 田熊清彦・梁木誠 1990 「栃木県の黒色土器」『東国土器研究』第3号 pp41-54
- 田中広明 1994 「関東地方の施釉陶器の流通と古代の社会(1)」『研究紀要』第11号 埼玉県埋文化財調査事業団
- 田中広明・渡邊理伊知 2017 「群馬県・埼玉県にみられる『俘囚・夷俘の痕跡』」「『俘囚・夷俘』とよばれたエミシの移配と東国社会」帝京大学文化財研究所 pp99-117
- 田中 琢 1967 「畿内と東国—古代土器生産の観点から—」『日本史研究』90号 日本史研究会
- 田中 琢 1969 「窯業(4) 猥内」三上次男・檜崎彰一編『日本の考古学IV歴史時代 上』河出書房新社 pp191-212

- 津島知弘 2013 「古代「斯波（志波）」郡北部の土器群変遷その1」『盛岡市遺跡の学び館学芸レポート』vol. 002 pp1-10
- 津島知弘 2015 「古代「斯波（志波）」郡北部の土器群変遷その2」『盛岡市遺跡の学び館学芸レポート』vol. 004 pp1-8
- 栃木県教育委員会編 1988 『下野国府跡VIII 土器類調査報告』栃木県埋文化財調査報告 第90集
- 富山県文化振興財団編 2007 『任海宮田遺跡発掘調査報告II』富山県文化振興財団埋文化財発掘調査報告第34集
- 仲田茂司 1994 「東北地方におけるロクロ土師器の受容とその背景」『考古学雑誌』79-3 pp312-382
- 奈良国立文化財研究所編 1991 『平城宮発掘調査報告書第XIII-内裏の調査II-』奈良国立文化財研究所学報 第50冊
- 奈良国立文化財研究所編 1995 『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告長屋王邸・藤原麻呂邸の調査』奈良国立文化財研究所学報第54冊
- 原 明芳 1987 「松本平における平安時代の食膳具—変化とその背景の予察—」『信濃』第39号第4号信濃史学会 pp277-302
- 原 明芳 1990 「信濃における平安時代の黒色土器—塩尻市吉田川西遺跡の出土資料をもとに—」『東国土器研究』第3号 pp87-106
- 原 明芳 2010 『奈良時代からつづく信濃の村 吉田川西遺跡』シリーズ「遺跡を学ぶ」069 新泉社
- 平野 修 2016 「平安時代黒色土器の出現契機とその系譜」『信濃』第69卷第3号信濃史学会 pp19-44
- 平野 修 2017 「武藏と甲斐における俘囚・夷俘痕跡」『「俘囚・夷俘」とよばれたエミシの移配と東国社会』帝京大学文化財研究所 pp41-80
- 福田健司 2017 『土器編年と集落構造』考古調査ハンドブック16 ニューサイエンス社
- 松村一良 2013 「西海道の集落遺跡における移配俘囚の足跡について—豊前・筑前・筑後・肥前4国の事例を中心にして—」『内海文化研究紀要』41 pp15-42
- 三浦京子 1990 「群馬県における8~11世紀の黒色土器について」『東国土器研究』第3号 pp55-70
- 森 隆 1989 「九州系黒色土器の器形的系譜に関する若干の観察—畿内系黒色土器との対比における—」『古文化談叢』第21集 pp117-142
- 森 隆 1990a 「平安時代以降の黒色土器生産」『東国土器研究』第3号 pp111-128
- 森 隆 1990b 「西日本の黒色土器生産（上）」『考古学研究』第37卷第2号 pp85-110
- 森 隆 1990c 「西日本の黒色土器生産（中）」『考古学研究』第37卷第3号 pp70-105
- 森 隆 1991 「西日本の黒色土器生産（下）」『考古学研究』第37卷第4号 pp59-81
- 森 隆 1995 「黒色土器」中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 安田光二 1975 「土師式土器「内黒」の焼成法の考察とその焼成実験の結果について」『福島考古』第16号 pp31-40
- 安田龍太郎 1995 「黒い色の食器」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所 pp617-628
- 渡邊泰彦 1999 「北巨摩地域における黒色土器について」『八ヶ岳考古』第11号 pp27-37
- 図版出典**
- 第1図 1・2・4・6・9・10・11 [埼玉県埋蔵文化財調査事業団編『中堀遺跡』第190集] 3・8・13 [埼玉県埋蔵文化財調査事業団編『北島遺跡V』第278集] 5 [埼玉県埋蔵文化財調査事業団編『築道下遺跡II』第199集] 7 [埼玉県埋蔵文化財調査事業団編『下田町遺跡II』第301集] 12 [長野県埋蔵文化財センター編 2015 『佐久市内2: 西近津遺跡群』104] 14 [群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009 『楽前遺跡』454]
- 第2図 筆者作成
- 第3図 1 [早稲田大学本庄校地文化財調査室編 2000 『大久保山VIII』早稲田大学本庄沢校地内埋蔵文化財調査報告書8] 2・3 [美里町教育委員会編 2006 『北貝戸遺跡・南十条遺跡』第17集] 4 ~ 9 [埼玉県埋蔵文化財調査事業団編『中

堀遺跡』190集】10・11〔神川町遺跡調査会編 2004『愛染遺跡第6・7・8・9・10地点、青柳古墳群元阿保支群』第7集】12・16・17〔埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2005『飯塚北遺跡I』第306集】13～15〔深谷市教育委員会編 2012『下郷遺跡VI』第125集】18〔埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2000『大寄遺跡I』第268集】19〔埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2002『大寄遺跡II』第280集】20・21熊谷市教育委員会編 2012『西別府遺跡I 西別府廃寺III』第13集】22〔埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 1991『宮町遺跡I』第96集】23〔埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 1992『稻荷前遺跡(A区)』第120集】24〔志木市教育委員会編 2009『志木遺跡群18』第41集】25〔埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2010『中道・中道下遺跡』第371集〕

- 第4図 26〔浦和市遺跡調査会編 2001『下野田稻荷原遺跡(第5次) 東裏遺跡(第5次) 大門西裏南遺跡(第3次) 発掘調査報告書』第295集】27・32～34〔大宮市遺跡調査会編 1993『氷川神社東遺跡・氷川神社遺跡・B-17号遺跡』第42集】28～31〔さいたま市遺跡調査会編 2006『中尾緑島東遺跡(第1次) 中尾緑島遺跡(第4次) 中尾中丸遺跡(第5次) 中尾中丸南遺跡(第3次)』第46集】35・36〔春日部市遺跡調査会編 1999『浜川戸遺跡』第7集】37～41・45～47〔埼玉県埋蔵文化財調査事業団編『北島遺跡V』第278集】42〔埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2013『八條遺跡』第407集】43〔蓮田市教育委員会編 1989『椿山遺跡-第3・4次調査-』第13集】44〔埼玉県埋蔵文化財調査事業団編『屋敷裏遺跡』第422集】48〔春日部市教育委員会編 1999『小渕山下北遺跡・八木崎遺跡2次・花積内谷耕地遺跡5次』第8集】49・50〔春日部市教育委員会編 2006『花積台耕地遺跡7次地点 慈恩寺原南遺跡4・5次地点 貝の内遺跡11・19次地点 小渕山下北遺跡8次地点浜川戸遺跡29次地点』第1集】51・52〔埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2017『楨野地北遺跡』第434集】53・54〔春日部市遺跡調査会編 2011『貝の内遺跡9次地点』第23集】55～57〔春日部市遺跡調査会編 1998『小渕山下北遺跡2次』第5集】第5図 58〔府中市教育委員会編 2004『武藏国府関連遺跡調査報告31』59〔大成エンジニアリング編 2015『武藏国府関連遺跡調査報告』60〔府中市教育委員会編 1981『武藏国府の調査XIII』〕61・62〔府中市教育委員会編 1985『武藏国府関連遺跡調査報告V』〕63〔盤古堂編 2008『武藏国府関連遺跡調査報告』〕64〔日本製鋼所遺跡調査会編 1995『武藏国府関連遺跡調査報告』〕65～67〔府中市教育委員会編 1999『武藏国府関連遺跡調査報告16』〕68〔調布市遺跡調査会編 2002『上布田遺跡』61〕69〔八王子市中郷遺跡調査団編 1998『中郷遺跡』〕70〔東京都埋蔵文化財センター編 2005『船田遺跡』第161集〕71・74～76〔日野市遺跡調査会 1997『落川遺跡II』〕72〔時田遺跡発掘調査団編 1995『時田遺跡』八王子市〕73〔稻城市堅台遺跡発掘調査会編 1996『堅台遺跡』〕77〔田端不動坂遺跡調査団編 1985『田端不動坂遺跡』19集〕78〔東京航業研究所編 2018『中里峠上遺跡』〕79～80〔北区教育委員会編 2003『田端不動坂遺跡V』30集〕81・82〔加藤建設編 2008『中里峠上遺跡』〕83・84〔大成エンジニアリング編 2007『中里峠上遺跡』〕85〔田端不動坂遺跡調査団編 1985『田端不動坂遺跡』〕86・87〔北区教育委員会編 1995『田端西台通遺跡III・田端不動坂遺跡III』19集〕88～91〔敷根不動原遺跡調査団編 2007『敷根不動原遺跡発掘調査報告書』〕92〔三荷座前遺跡発掘調査団編 1997『川崎市高津区三荷座前遺跡第2地点発掘調査報告書』〕93〔奈良地区遺跡調査団編 1982『横浜市緑区奈良町奈良地区遺跡群(No.11)受地だいやま遺跡』〕

- 第6図 1〔盤古堂編 2008〕2〔日本製鋼所遺跡調査会編 1995〕3〔府中市教育委員会編 2004『武藏国府の調査25』〕4〔府中市教育委員会編 2004『武藏国府の調査26』〕5〔府中市教育委員会編 1996『武藏国府関連遺跡調査報告16』〕6〔府中市教育委員会編 1999『武藏国府関連遺跡調査報告21』〕7〔府中市教育委員会編 1985『武藏国府関連遺跡調査報告V』〕8〔北区教育委員会編 2003『田端不動坂遺跡V』北区第30集〕9〔落川遺跡調査会編 1997『落川遺跡II』〕10〔落川・一の宮遺跡調査会編 2001『落川・一の宮遺跡II』〕11〔東京都埋蔵文化財センター編 2012『山王上遺跡』第267集〕12〔東京都埋蔵文化財センター編 1986『多摩ニュータウン遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第7集〕13〔東京都埋蔵文化財センター編 1995『多摩ニュータウン遺跡先行調査報告1』第20集〕14〔東京都埋蔵文化財センター編 2003『多摩ニュータウンNo.436遺跡』第142集〕15〔調布市遺跡調査会編 2002『上布田遺跡』〕16〔山梨文化財研究所編 2014『上つ原遺跡(第2次)・大塚日向遺跡』〕17～22〔山梨文化財研究所編 2014『竜ヶ峰遺跡第4次』多摩市第69集〕23〔大宮市遺跡

調査会編 1993『氷川神社東遺跡・氷川神社遺跡・B-17号遺跡』第42集] 24~37 [埼玉県埋蔵文化財調査事業団編『中堀遺跡』190集]

集成資料文献一覧 埼玉県1~193、東京都194~327、神奈川県328~331五十音順

埼玉県

1. 朝霞市教育委員会編 2000『向山遺跡第3・4・5・6地点発掘調査報告書』朝霞市埋蔵文化財発掘調査報告書第14集:
2. 岩槻市遺跡調査会編 1988『徳力西遺跡 飯塚原地遺跡』岩槻市遺跡調査会: 3. 岩槻市遺跡調査会編 2002『府内三丁目遺跡I』岩槻市遺跡調査会: 4. 浦和市遺跡調査会編 1982『井沼方・大北・和田北・西谷・吉場遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第20集: 5. 浦和市遺跡調査会編 1991『和田北遺跡発掘調査報告書(第4次)』浦和市遺跡調査会報告書第144集: 6. 浦和市遺跡調査会編 1991『和田北遺跡発掘調査報告書(第4次)』浦和市遺跡調査会報告書第144集: 7. 浦和市遺跡調査会編 1992『不動谷遺跡(第2次)・駒前南遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第150集: 8. 浦和市遺跡調査会編 1993『大久保領家片町遺跡発掘調査報告書(第1地点)』浦和市遺跡調査会報告書第163集: 9. 浦和市遺跡調査会編 1995『駒形南遺跡発掘調査報告書(第1次、第2次)』浦和市遺跡調査会報告書第192集: 10. 浦和市遺跡調査会編 1996『大崎東新井遺跡(第2次) 大崎北久保遺跡(第1次、第2次) 鶴巻西遺跡(第2次) 発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第216集: 11. 浦和市遺跡調査会編 2000『東裏西遺跡(第2次) 東裏遺跡(第4次) 稲荷原遺跡(第3次) 大門西裏南遺跡(第2次) 発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第277集: 12. 浦和市遺跡調査会編 2001『下野田稻荷原遺跡(第5次) 東裏遺跡(第5次) 大門西裏南遺跡(第3次) 発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第295集: 13. 大宮市遺跡調査会編 1981『東北原遺跡—第5次調査—』大宮市遺跡調査会報告第2集: 14. 大宮市遺跡調査会編 1985『東北原遺跡—第6次調査—』大宮市遺跡調査会報告別冊1: 15. 大宮市遺跡調査会編 1989『御藏山中遺跡発掘調査報告—I—I』大宮市遺跡調査会報告第26集: 16. 大宮市遺跡調査会編 1993『深作稻荷台遺跡 東北原遺跡—第9次調査—』大宮市遺跡調査会報告第40集: 17. 大宮市遺跡調査会編 1993『氷川神社東遺跡・氷川神社遺跡・B-17号遺跡』大宮市遺跡調査会報告第42集: 18. 大宮市教育委員会編 1995『市内遺跡発掘調査報告』大宮市文化財調査報告第38集: 19. 大宮市教育委員会編 1999『市内遺跡発掘調査報告』大宮市文化財調査報告第46集: 20. 大宮市教育委員会編 2001『市内遺跡発掘調査報告』大宮市文化財調査報告第50集: 21. 岡部町教育委員会編 1983『西浦北・宮西』岡部町教育委員会: 22. 岡部町教育委員会編 1995『中宿遺跡』岡部町教育委員会埋蔵文化財調査報告書第1集: 23. 岡部町教育委員会編 2001『町内遺跡II』岡部町埋蔵文化財調査会報告書第6集: 24. 岡部町教育委員会編 2002『町内遺跡III』岡部町埋蔵文化財調査報告書第7集: 25. 岡部町教育委員会編 2004『塚東遺跡—第1次調査—』岡部町遺跡調査会報告書第12集: 26. 小川町教育委員会編 2004『町内遺跡発掘調査報告書X』小川町埋蔵文化財調査報告書第21集: 27. 春日部市遺跡調査会編 1998『小渕山下北遺跡2次』春日部市遺跡調査会報告書第5集: 28. 春日部市遺跡調査会編 1999『浜川戸遺跡』春日部市遺跡調査会報告書第7集: 29. 春日部市遺跡調査会編 2001『浜川戸遺跡17, 19, 20次』春日部市遺跡調査会報告書第12集: 30. 春日部市遺跡調査会編 2002『浜川戸遺跡5, 6, 7, 24, 25, 26次』春日部市遺跡調査会報告書第11集: 31. 春日部市遺跡調査会編 2004『八木崎遺跡3次』浜川戸遺跡27, 28次, 小渕山下北遺跡6次, 慈恩寺原南遺跡2次』春日部市遺跡調査会報告書第13集: 32. 春日部市遺跡調査会編 2005『浜川戸遺跡1, 2, 3, 4次調査地点』春日部市遺跡調査会報告書第18集: 33. 春日部市遺跡調査会編 2006『小渕山下遺跡2次調査地点』春日部市遺跡調査会報告書第19集: 35. 春日部市遺跡調査会編 2011『貝の内遺跡9次地点』春日部市遺跡調査会報告書第23集: 36. 春日部市教育委員会編 1998『市内遺跡調査I』春日部市埋蔵文化財調査報告書第7集: 37. 春日部市教育委員会編 1999『小渕山下北遺跡・八木崎遺跡2次・花積内谷耕地遺跡5次』春日部市埋蔵文化財調査報告書第8集: 38. 春日部市教育委員会編 2001『花積内谷耕地遺跡6次・花積台耕地遺跡5次・谷向遺跡・塚内16号墳・塚内17号墳・小渕山下北遺跡4, 5次』春日部市埋蔵文化財調査報告書第10集: 39. 春日部市教育委員会編 2006『花積台耕地遺跡7次地点』慈恩寺原南遺跡4・5次地点 貝の内遺跡11・19次地点 小渕山下北遺跡8次地点 浜川戸遺跡29次地点』春日部市埋蔵文化財発掘調査報告書第1集: 40. 春日部市教育委員会編 2007『塚内14号墳』春日部市埋蔵文化財発掘調査報告書第2集: 41. 春日

都市教育委員会編 2008『大塚遺跡 6 次地点、中野吉岡遺跡 1, 2 次地点、小渕山下遺跡 5 次調査、小渕山下北遺跡 9, 10 次地点』春日部市埋蔵文化財発掘調査報告書第 6 集：42. 春日部市教育委員会編 2008『小渕山下遺跡 6 地点』春日部市埋蔵文化財発掘調査報告書第 5 集：43. 春日部市教育委員会編 2010『貝の内遺跡 8, 13, 18 次地点、陣屋遺跡 8 次地点、中屋舗遺跡 1 次地点』春日部市埋蔵文化財発掘調査報告書第 10 集：44. 春日部市教育委員会編 2011『小渕山下北遺跡 11, 12, 13 次地点、浜川戸遺跡 30 次地点、貝の内遺跡 25 次地点』春日部市埋蔵文化財発掘調査報告書第 11 集：45. 春日部市教育委員会編 2013『小渕山下遺跡 7, 8 次地点、小渕山下北遺跡 15, 16, 17, 18, 19 次地点』春日部市埋蔵文化財発掘調査報告書第 14 集 46. 加須市遺跡調査会編 1982『花崎遺跡』加須市遺跡調査会報告書第 1 集：47. 神川町遺跡調査会編 2004『愛染遺跡第 6・7・8・9・10 地点、青柳古墳群元阿保支群』神川町遺跡調査会発掘調査報告第 7 集：48. 川口市遺跡調査会編 1985『上台遺跡群 B 地点七郷神社裏遺跡』川口市遺跡調査会報告第 5 集：49. 川口市遺跡調査会編 1985『天神山・宮脇遺跡』川口市遺跡調査会報告書第 6 集：50. 川口市遺跡調査会編 1986『八本木遺跡』川口市遺跡調査会報告第 9 集：51. 川口市遺跡調査会編 2017『三ツ和遺跡』川口市遺跡調査会報告第 48 集：52. 川口市教育委員会編 1985『上台遺跡群 B 地点七郷神社裏遺跡』川口市文化財調査報告書第 21 集：53. 川口市教育委員会編 2018『国庫補助事業市内遺跡発掘調査報告書平成 27 年度調査』：54. 川口市教育委員会編 2018『宝泉寺遺跡』川口市埋蔵文化財発掘調査報告書：55. 川越市教育委員会編 1996『川越市文化財発掘調査報告書（X I）』川越市教育委員会第 11 集：56. 川越市教育委員会編 2005『八幡前・若宮遺跡（第 1 次調査）』川越市遺跡調査会報告第 31 集：57. 行田市教育委員会編 2010『市内遺跡発掘調査報告書 V』行田市文化財調査報告書第 45 集：58. 行田市教育委員会編 2014『市内遺跡発掘調査報告書 VI』行田市文化財調査報告書第 54 集：59. 熊谷市遺跡調査会編 2001『諏訪木遺跡』熊谷市遺跡調査会埋蔵文化財報告書：60. 熊谷市教育委員会編 2000『西別府祭祀遺跡』平成 11 年度埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書：61. 熊谷市教育委員会編 2010『前中西遺跡 V』埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書第 7 集：62. 熊谷市教育委員会編 2012『西別府遺跡 I 西別府廃寺 III』埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書第 13 集：63. 熊谷市在家遺跡調査会編 2015『在家遺跡』埼玉県熊谷市在家遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書：64. 越谷市教育委員会編 2016『大道遺跡発掘調査報告書 I』越谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第 1 集：65. 児玉町教育委員会編 1983『阿知越遺跡 I』児玉町文化財調査報告書第 3 集：66. 児玉町教育委員会編 1999『雷電下 III・南ノ前遺跡』児玉町文化財調査報告書第 32 集：67. 児玉町教育委員会編 1999『金佐奈遺跡 B 地点 II』児玉町文化財調査報告書第 33 集：68. 埼玉県遺跡調査会編 1972『水深』東北縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 I : 69. 埼玉県遺跡調査会編 1973『山田遺跡・相撲場遺跡発掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会報告第 18 集：70. 埼玉県遺跡調査会編 1977『田中前遺跡』埼玉県遺跡調査会報告書第 32 集：71. 埼玉県遺跡調査会編 1979『吉岡・東本郷台・上一斗蒔遺跡』埼玉県遺跡調査会報告書第 37 集：72. 埼玉県教育委員会編 1978『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告 VII』埼玉県遺跡発掘調査報告書第 15 集：73. 埼玉県教育委員会編 1979『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告 IX』埼玉県遺跡発掘調査報告書第 22 集：74. 埼玉県教育委員会編 1979『大山』埼玉県遺跡発掘調査報告書第 23 集：75. 埼玉県教育委員会編 1984『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書一人工遺物・総括編一（遺構・遺物）』：76. 埼玉県教育委員会編 1987『宿上貝塚・御林遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 1982『一般国道 17 号線深谷バイパス道路関係埋蔵文化財発掘調査報告—I—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 9 集：78. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 1982『関越自動車道関係埋蔵文化財調査報告 XIV』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 16 集：79. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 1985『愛宕通遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 51 集：80. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 1986『樋の上遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 59 集：81. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 1989『北島遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 81 集：82. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 1989『北島遺跡（第 9・10・11 地点）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 88 集：83. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 1991『宮町遺跡—I—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 96 集：84. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 1991『北島遺跡（第 12・13 地点）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 103 集：85. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 1992『稻荷前遺跡（A 区）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 120 集：86. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 1993『水判土堀の内・林光寺・根切』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 132 集：87. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 1994『光山遺跡群』

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 137 集 : 88. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 1995『宮ヶ谷戸 / 根岸 / 八日市 / 城西』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 172 集 : 89. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 1996『今羽丸山遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 173 集 : 90. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 1996『新屋敷遺跡 C 区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 175 集 : 91. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 1996『菅原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 169 集 : 92. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 1997『山王裏 / 上川入 / 西浦 / 野本氏館跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 184 集 : 93. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 1997『中堀遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 190 集 : 94. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 1998『地神 / 塔頭』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 193 集 : 95. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 1998『新屋敷遺跡 D 区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 194 集 : 96. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 1998『北島遺跡IV』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 195 集 : 97. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 1998『築道下遺跡 II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 199 集 : 98. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 1998『八ツ島遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 219 集 : 99. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2000『道合高木前遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 236 集 : 100. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2000『築道下遺跡IV』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 246 集 : 101. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2001『下野田稻荷原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 263 集 : 102. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2000『大寄遺跡 I』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 268 集 : 103. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2001『馬場裏遺跡 II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 270 集 : 104. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2002『北島遺跡 V』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 278 集 : 105. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2002『熊野遺跡 (A・C・D 区)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 279 集 : 106. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2002『大寄遺跡 II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 280 集 : 107. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2002『八木崎遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 281 集 : 108. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2002『谷沢遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 282 集 : 109. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2003『如意遺跡IV』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 285 集 : 110. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2004『北島遺跡 IX』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 293 集 : 111. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2004『下田町遺跡 I』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 296 集 : 112. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2004『古宮 / 中条里 / 上河原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 298 集 : 113. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2005『飯塚北遺跡 I』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 306 集 : 114. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2005『下田町遺跡 II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 301 集 : 115. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2005『北島遺跡 X II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 304 集 : 116. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2005『北島遺跡 X II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 304 集 : 117. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2006『下田町遺跡 IV』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 320 集 : 118. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2006『飯塚北 II / 飯塚古墳群 II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 321 集 : 119. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2007『森脇遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 337 集 : 120. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2008『釣上碇遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 348 集 : 121. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2009『反町遺跡 I』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 361 集 : 122. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2010『中道・中道下遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 371 集 : 123. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2013『八條遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 407 集 : 124. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2014『長竹遺跡 I』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 413 集 : 125. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2015『宮前遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 417 集 : 126. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2016『屋敷裏遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 422 集 : 127. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2017『中平遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 431 集 : 128. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2017『前領家遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 430 集 : 129. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2017『楨野地北遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 434 集 : 130. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2018『米の宮遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 439 集 : 131. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2018『茂手木遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 438 集 : 132. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2018『毛長沼外瓦 A 遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 447 集 : 133. さいたま市

遺跡調査会編 2003 『B-22 号遺跡（土呂陣屋跡）—L・M・N 地点—』 さいたま市遺跡調査会第 15 集：134. さいたま市遺跡調査会編 2004 『下野田稻荷原遺跡（第 6 次）東裏遺跡（第 3 次）』 さいたま市遺跡調査会第 26 集：135. さいたま市遺跡調査会編 2006 『中尾緑島東遺跡（第 1 次）中尾緑島遺跡（第 4 次）中尾中丸遺跡（第 5 次）中尾中丸南遺跡（第 3 次）』 さいたま市遺跡調査会第 46 集：136. さいたま市遺跡調査会編 2007 『東裏遺跡（第 8 次）』 さいたま市遺跡調査会第 56 集：137. さいたま市遺跡調査会編 2007 『駒形南遺跡（第 5 次）中尾緑島遺跡（第 5 次）』 さいたま市遺跡調査会第 58 集：138. さいたま市遺跡調査会編 2008 『中野田島ノ前遺跡（第 2 次）』 さいたま市遺跡調査会第 68 集：139. さいたま市遺跡調査会編 2011 『中野田堀ノ内遺跡（第 2・3 次）下野田稻荷原遺跡（第 11 次）下野田本村遺跡（第 7 次）』 さいたま市遺跡調査会第 115 集：140. さいたま市遺跡調査会編 2011 『丸ヶ崎遺跡群—II—』 さいたま市遺跡調査会第 117 集：141. さいたま市遺跡調査会編 2012 『土呂陣屋跡 [B-22 号遺跡] (Q・R・S 地点)』 さいたま市遺跡調査会第 125 集：142. さいたま市教育委員会編 2003 『東裏遺跡（第 6 次調査）円正寺遺跡（第 4 次調査）附島遺跡（第 3・4 次調査）並木貝塚（第 1 次調査）宿宮前遺跡（第 3・4 次調査）』 さいたま市内遺跡発掘調査報告書第 2 集：143. さいたま市教育委員会編 2005 『側ヶ谷戸貝塚（第 5 次調査）道場寺院跡（第 2 次調査）高見北遺跡東裏遺跡（第 7 次調査）宿宮前遺跡（第 5 次調査）』 さいたま市内遺跡発掘調査報告書第 4 集：144. 坂戸市教育委員会編 2010 『宮町遺跡』 宮町遺跡発掘調査報告書 II：145. 志木市遺跡調査会編 2008 『城山遺跡第 58・60 地点発掘調査報告書』 志木市遺跡調査会調査報告第 17 集：146. 志木市教育委員会編 2009 『志木遺跡群 18』 志木市の文化財第 41 集：147. 庄和町遺跡調査会編 2002 『陣屋遺跡第 1・3・4・5・6・7 次調査の記録』 庄和町文化財調査報告第 7 集庄和町遺跡調査会報告書第 10 集：148. 杉戸町教育委員会編 2013 『町内遺跡発掘調査 II』 杉戸町文化財調査報告書第 19 集：149. 所沢市教育委員会編 2010 『東の上遺跡—飛鳥・奈良・平安時代編 I—』 所沢市埋蔵文化財調査報告書第 49 集：150. 所沢市教育委員会編 2013 『東の上遺跡—飛鳥・奈良・平安時代編 III—』 所沢市埋蔵文化財調査報告書第 59 集：151. 所沢市教育委員会編 2015 『柳野遺跡』 所沢市埋蔵文化財調査報告書第 65 集：152. 富元久美子 2018 「高麗郡建郡と東金子窯」『古代高麗郡の建郡と東アジア』古代渡来文化研究 1 高志書院：153. 蓮田市教育委員会編 1989 『椿山遺跡—第 3・4 次調査—』 埼玉県蓮田市文化財調査報告書第 13 集：154. 鳩ヶ谷市教育委員会編 1999 『前田字六反畠第 1 遺跡—南 4 丁目 25 番地 1 号他地点』 鳩ヶ谷市文化財調査報告書第 9 集：155. 鳩ヶ谷市教育委員会編 2001 『前田字前田第 1 遺跡—南 5 丁目 3—1 他地点』 鳩ヶ谷市文化財調査報告書第 15 集：156. 原遺跡発掘調査会編 2000 『原遺跡（8 次）石田堤（2 次）原遺跡発掘調査会』 157. 飯能市教育委員会編 1997 『新井原遺跡・榎戸遺跡』 笠縫土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 1：158. 飯能市教育委員会編 2002 『新堀遺跡第 1～8 次調査』 笠縫土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 2：159. 飯能市教育委員会編 2016 『加能里遺跡第 42・43 次調査』 岩沢北部土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 2：160. 深谷市教育委員会編 2007 『熊野遺跡 VI』 深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第 82 集：161. 深谷市教育委員会編 2007 『幡羅遺跡 II—正倉跡の調査（2）—』 埼玉県深谷市埋蔵文化財調査報告書第 88 集：162. 深谷市教育委員会編 2007 『塚東遺跡 II』 深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第 86 集：163. 深谷市教育委員会編 2008 『深谷市内遺跡 X V』 深谷市埋蔵文化財調査報告書第 94 集：164. 深谷市教育委員会編 2008 『幡羅遺跡 III—実務官衙域（1）の調査 道路跡の調査—』 埼玉県深谷市埋蔵文化財調査報告書第 99 集：165. 深谷市教育委員会編 2009 『深谷市内遺跡 XVI』 埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第 105 集：166. 深谷市教育委員会編 2009 『幡羅遺跡 V—遺跡北東部の調査—』 埼玉県深谷市埋蔵文化財調査報告書第 109 集：167. 深谷市教育委員会編 2010 『幡羅遺跡 VI—実務官衙域の調査（3）・実務官衙域周辺の調査—』 埼玉県深谷市埋蔵文化財調査報告書第 111 集：168. 深谷市教育委員会編 2011 『熊野遺跡 X II』 埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第 121 集：169. 深谷市教育委員会編 2011 『幡羅遺跡 VII / 下郷遺跡 V—遺跡南西部の調査 / 周辺集落の調査—』 埼玉県深谷市埋蔵文化財調査報告書第 123 集：170. 深谷市教育委員会編 2012 『下郷遺跡 VI』 埼玉県深谷市埋蔵文化財調査報告書第 125 集：171. 深谷市教育委員会編 2012 『二の丸遺跡 / 熊野遺跡第 143 次 / 熊野遺跡第 146 次 / 黒田豊前守陣屋跡』 埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第 128 集：172. 深谷市教育委員会編 2013 『下郷遺跡 VII』 埼玉県深谷市埋蔵文化財調査報告書第 130 集：173. 深谷市教育委員会編 2014 『下郷遺跡 VIII』 埼玉県深谷市埋蔵文化財調査報告書第 136 集：174. 本庄市遺跡調査会編 2012 『秋山西部遺跡群』 本庄市遺跡調査会報告書第 43 集：175. 本庄市遺跡調査会編 2010 『秋山大

町東遺跡 秋山諏訪平遺跡』本庄市遺跡調査会報告書第37集：176. 本庄市教育委員会編 2012『久下前遺跡IV（D1・E1地点）・久下東遺跡V（F1地点）』本庄市埋蔵文化財調査報告書第28集：177. 美里町教育委員会編 1996『木部原遺跡』美里町遺跡発掘調査報告書第4集：178. 美里町教育委員会編 1998『猪俣北古墳群・引地遺跡・滝ノ沢遺跡』：179. 美里町教育委員会編 1999『鍛冶屋峯遺跡・川向遺跡・森後遺跡』美里町遺跡発掘調査報告書第10集：180. 美里町教育委員会編 2006『北貝戸遺跡・南十条遺跡』美里町遺跡発掘調査報告書第17集：181. 美里町教育委員会編 2011『新倉館跡・烏森遺跡・道灌山古墳 附勝丸稻荷神社古墳』美里町遺跡発掘調査報告書第20集：182. 美里町教育委員会編 2012『宮ヶ谷戸遺跡・砂田遺跡』美里町遺跡発掘調査報告書第21集：183. 妻沼町遺跡調査会編 2005『鵜ノ森遺跡 2005年発掘調査の概要』妻沼町遺跡調査会：184. 寄居町遺跡調査会編 1999『用土前峯遺跡（1次）』寄居町遺跡調査会報告第18集：185. 和光市遺跡調査会編 1994『峯遺跡・峯前遺跡』和光市遺跡調査会・和光市教育委員会：186. 和光市遺跡調査会編 2007『市内遺跡発掘調査報告書10』和光市埋蔵文化財調査報告書第38集：187. 早稲田大学所沢校地文化財調査室編 1990『お伊勢山遺跡の調査第4部弥生時代から平安時代』早稲田大学所沢校地内埋蔵文化財調査報告書：188. 早稲田大学本庄校地文化財調査室編 1980『大久保山I』早稲田大学本庄沢校地内埋蔵文化財調査報告書1：189. 早稲田大学本庄校地文化財調査室編 1996『大久保山IV』早稲田大学本庄沢校地内埋蔵文化財調査報告書4：190. 早稲田大学本庄校地文化財調査室編 1999『大久保山V』早稲田大学本庄沢校地内埋蔵文化財調査報告書5：191. 早稲田大学本庄校地文化財調査室編 1999『大久保山VII』早稲田大学本庄沢校地内埋蔵文化財調査報告書7：192. 早稲田大学本庄校地文化財調査室編 2000『大久保山VIII』早稲田大学本庄沢校地内埋蔵文化財調査報告書8：193. 早稲田大学本庄校地文化財調査室編 2001『大久保山X』早稲田大学本庄沢校地内埋蔵文化財調査報告書10

#### 東京都

194. 吾妻考古学研究所編 2009『小野田遺跡第4次・第5次発掘調査報告書』東京都八王子市：195. 足立区伊興遺跡調査会編 1997『伊興遺跡』東京都足立区：196. 足立区伊興遺跡調査会編 1999『伊興遺跡II』東京都足立区：197. 足立区伊興遺跡調査会編 2000『若宮八幡神社遺跡II』東京都足立区：198. 荒川区道灌山遺跡調査団編 1989『道灌山遺跡E地点発掘調査報告書』：199. 板橋区四葉遺跡調査会編 1990『四葉地区遺跡平成元年度』：200. 板橋区四葉遺跡調査会編 2000『四葉地区遺跡平成11年度』：201. 稲城市堅台遺跡発掘調査会編 1996『堅台遺跡』：202. 大藏春日神社北遺跡調査会編 2000『大藏春日神社北遺跡』東京都町田市：203. 落川・一の宮遺跡調査会編 2001『落川・一の宮遺跡II古代編』：204. 加藤建設株式会社編 2001『女塚貝塚』東京都大田区：205. 加藤建設株式会社編 2004『南広間地遺跡』東京都日野市：206. 加藤建設株式会社編 2008『中里峠上遺跡』東京都北区：207. 株式会社盤古堂編 2008『武藏国府関連遺跡調査報告』：208. 株式会社盤古堂編 2015『武藏国府関連遺跡調査報告書』：209. 協和開発株式会社編 2013『武藏国府関連遺跡調査報告』：210. 国分寺市遺跡調査会編 1982『武藏国分寺遺跡調査会年報II』：211. 国分寺市遺跡調査会編 1982『武藏国分寺遺跡発掘調査概報VII』：212. 国分寺市遺跡調査会編 1989『武藏国分寺跡発掘調査概報XIV』：213. 国分寺市遺跡調査会編 1994『武藏国分寺跡発掘調査概報XX』：214. 国分寺市遺跡調査会編 1999『武藏国分寺跡発掘調査概報XXIII』：215. 国分寺市遺跡調査会編 2001『武藏国分寺跡発掘調査概報25』：216. 国分寺市遺跡調査会編 2002『武藏国分寺跡発掘調査概報26』：217. 国分寺市遺跡調査会編 2003『武藏国分寺跡発掘調査概報29』：218. 国分寺市教育委員会編 2009『平成19年度国分寺市埋蔵文化財調査年報』：219. 国分寺市教育委員会編 2013『武藏国分寺跡発掘調査概報38』：220. 十条久保遺跡調査会編 1999『十条久保遺跡』東京都北区：221. 大成エンジニアリング株式会社編 2007『中里峠上遺跡』東京都北区：222. 大成エンジニアリング株式会社編 2008『前野田向遺跡第9地点発掘調査報告書』東京都板橋区：223. 大成エンジニアリング株式会社編 2015『武藏国府関連遺跡調査報告』：224. 忠生遺跡調査会 2011『忠生遺跡A地区（IV）』東京都町田市：225. 立川市教育委員会編 2001『立川市埋蔵文化財調査報告書集』立川市埋蔵文化財調査報告7：226. 田端不動坂遺跡調査団編 1985『田端不動坂遺跡』：227. 多摩市遺跡調査会編 1998『東寺方遺跡』多摩市埋蔵文化財調査報告44：228. 多摩ニュータウン遺跡調査会編 1979『多摩ニュータウン遺跡調査概報－昭和54年度－』：229. 調布市遺跡調査会編 2002『上布田遺跡』調布市埋蔵文化財調査報告61：230. 調布市遺跡調査会編 2003『下石原遺跡』調布市埋蔵文化財調査報告70：231. 調布市遺跡

調査団編 1987『調布市上石原遺跡』調布市埋蔵文化財調査報告 22 : 232. 東京航業研究所編 2018『中里峠上遺跡』東京都北区:233. 東京都北区教育委員会編 1995『田端西台通遺跡III・田端不動坂遺跡III』北区埋蔵文化財調査報告 19集: 234.. 東京都北区教育委員会編 2003『田端不動坂遺跡V』北区埋蔵文化財調査報告 30集: 235. 東京都北区教育委員会編 2012『北区埋蔵文化財調査年報一平成22年度一』: 236 東京都埋蔵文化財センター編 1981『多摩ニュータウン遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第1集: 237. 東京都埋蔵文化財センター編 1982『多摩ニュータウン遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第2集: 238. 東京都埋蔵文化財センター編 1983『多摩ニュータウン遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第4集: 239 東京都埋蔵文化財センター編 1984『多摩ニュータウン遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第5集: 240. 東京都埋蔵文化財センター編 1986『多摩ニュータウン遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第7集: 241. 東京都埋蔵文化財センター編 1989『多摩ニュータウン遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第10集: 242. 東京都埋蔵文化財センター編 1993『多摩ニュータウン遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第15集: 243. 東京都埋蔵文化財センター編 1995『多摩ニュータウン遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第21集: 244. 東京都埋蔵文化財センター編 1995『多摩ニュータウン遺跡先行調査報告1』東京都埋蔵文化財センター調査報告第20集: 245. 東京都埋蔵文化財センター編 1996『多摩ニュータウン遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第27集: 246. 東京都埋蔵文化財センター編 1996『多摩ニュータウン遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第28集: 247. 東京都埋蔵文化財センター編 1997『多摩ニュータウン遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第38集: 248. 東京都埋蔵文化財センター編 1999『多摩ニュータウン遺跡No.107遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第64集: 249. 東京都埋蔵文化財センター編 1999『多摩ニュータウン遺跡先行調査報告12』: 250. 東京都埋蔵文化財センター編 2000『多摩ニュータウン遺跡No.939遺跡II』東京都埋蔵文化財センター調査報告第81集: 251. 東京都埋蔵文化財センター編 2000『美山町赤根遺跡(C地区)』東京都埋蔵文化財センター調査報告第83集: 252. 東京都埋蔵文化財センター編 2002『多摩ニュータウン遺跡No.327・329・330遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第59集: 253. 東京都埋蔵文化財センター編 2002『多摩ニュータウン遺跡No.960遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第103集: 254. 東京都埋蔵文化財センター編 2003『多摩ニュータウンNo.436遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第142集: 255. 東京都埋蔵文化財センター編 2004『多摩ニュータウン遺跡No.243・244遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第155集: 256. 東京都埋蔵文化財センター編 2005『船田遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第161集: 257. 東京都埋蔵文化財センター編 2007『No.16遺跡・神明上遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第213集: 258. 東京都埋蔵文化財センター編 2008『武藏国府関連遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第228集: 259. 東京都埋蔵文化財センター編 2012『山王上遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第267集: 260. 東京都埋蔵文化財センター編 2012『田端西台通遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第272集: 261. 東京都埋蔵文化財センター編 2016『江古田遺跡IV』東京都埋蔵文化財センター調査報告第312集: 262. 都営川越道住宅遺跡調査会編 1999『武藏台遺跡』: 263. 時田遺跡発掘調査団編 1995『時田遺跡』東京都八王子市: 264. 凸版印刷工場内遺跡調査会編 1999『志村遺跡第6地点発掘調査報告書』東京都板橋区: 265. 都立府中病院内遺跡調査会編 1993『武藏台遺跡II』東京都府中市: 266. 日本製鋼所遺跡調査会編 1985『武藏国府関連遺跡調査報告』: 267. 日本製鋼所遺跡調査会編 1995『武藏国府関連遺跡調査報告』: 268. 八王子市中郷遺跡発掘調査団編 1998『中郷遺跡』東京都八王子: 269 東村山市遺跡調査会編 2006『下宅部遺跡II』: 270. 日野市遺跡調査会編 1978『日野市遺跡調査会年報77』: 271. 日野市遺跡調査会編 1981『日野市遺跡調査会年報79』: 272. 日野市遺跡調査会編 2001『南広間地遺跡第53次調査』: 273. 日野市落川遺跡調査会編 1997『落川遺跡II』: 274. 日野市栄町遺跡調査会編 1987『日野市栄町遺跡調査概報III』: 275. 日野市栄町遺跡調査会編 1995『日野市栄町遺跡』: 276. 府中市教育委員会編 1984『武藏国府関連遺跡調査報告VI』: 277. 府中市教育委員会編 1985『武藏国府関連遺跡調査報告V』: 278. 府中市教育委員会編 1986『武藏国府関連遺跡調査報告VII』: 279. 府中市教育委員会編 1991『武藏国府関連遺跡調査報告12・天神町遺跡調査報告II』: 280. 府中市教育委員会編 1991『武藏国府関連遺跡調査報告13』: 281. 府中市教育委員会編 1996『武藏国府関連遺跡調査報告15』: 282. 府中市教育委員会編 1999『武藏国府関連遺跡調査報告16』: 283. 府中市教育委員会編 1996『武藏国府関連遺跡調査報告17』: 284. 府中市教育委員会編 1997『武藏国府関連遺跡調査報告19』: 285. 府中市教育委員会編

1999『武藏国府関連遺跡調査報告 21』: 286. 府中市教育委員会編 1999『武藏国府関連遺跡調査報告 22・武藏国分寺跡調査報告 2』: 287. 府中市教育委員会編 1999『武藏国府関連遺跡調査報告 23・天神町遺跡調査報告 3』: 288. 府中市教育委員会編 1999『武藏国府関連遺跡調査報告 23・天神町遺跡調査報告 3』: 289. 府中市教育委員会編 2004『武藏国府関連遺跡調査報告 30』: 290. 府中市教育委員会編 2004『武藏国府関連遺跡調査報告 31』: 291. 府中市教育委員会編 2005『武藏国府関連遺跡調査報告 34』: 292. 府中市教育委員会編 2005『武藏国府関連遺跡調査報告 35』: 293. 府中市教育委員会編 2005『武藏国府関連遺跡調査報告 35』: 294. 府中市教育委員会編 2006『武藏国府関連遺跡調査報告 36』: 295. 府中市教育委員会編 2011『武藏国府関連遺跡調査概報』: 296. 府中市教育委員会編 2012『武藏国府関連遺跡調査報告 45』: 297. 府中市教育委員会編 2012『武藏国府関連遺跡調査報告 52』: 298. 府中市教育委員会編 2016『武藏国府関連遺跡調査報告 56』: 299. 府中市教育委員会編 1979『武藏国府の調査VIII』: 300. 府中市教育委員会編 1979『武藏国府の調査IX』: 301. 府中市教育委員会編 1981『武藏国府の調査X III』: 302. 府中市教育委員会編 1982『武藏国府の調査X IV』: 303. 府中市教育委員会編 1985『武藏国府の調査X VI』: 304. 府中市教育委員会編 2001『武藏国府の調査 18』: 305. 府中市教育委員会編 2001『武藏国府の調査 19』: 306. 府中市教育委員会編 2002『武藏国府の調査 20』: 307. 府中市教育委員会編 2002『武藏国府の調査 21』: 308. 府中市教育委員会編 2003『武藏国府の調査 23』: 309. 府中市教育委員会編 2003『武藏国府の調査 24』: 310. 府中市教育委員会編 2004『武藏国府の調査 25』: 311. 府中市教育委員会編 2004『武藏国府の調査 26』: 312. 府中市教育委員会編 2008『武藏国府の調査 38』: 313. 府中市教育委員会編 2009『武藏国府の調査 39』: 314. 府中市教育委員会編 2010『武藏国府の調査 40』: 315. 府中市教育委員会編 2011『武藏国府の調査 41』: 316. 府中市教育委員会編 2012『武藏国府の調査 42』: 317. 府中市教育委員会編 2017『武藏国府の調査 47』: 318. 町田木曾森野地区遺跡調査会編 1995『木曾森野遺跡III』東京都町田市: 319. 町田市・すぐじ山遺跡調査会編 1977『すぐじ山遺跡』町田市: 320. 町田市小田急野津田・金井団地内遺跡調査会編 1984『川島谷遺跡群 I』町田市: 321. 町田市小田急野津田・金井団地内遺跡調査会編 1984『川島谷遺跡群 II』町田市: 322. 武藏文化財研究所編 2004『武藏国府関連遺跡調査報告その 2』: 323. 武藏文化財研究所編 2004『武藏国府関連遺跡調査報告』: 324. 武藏文化財研究所編 2007『武藏国府関連遺跡調査報告』: 325. 武藏文化財研究所編 2010『東耕地遺跡IV』東京都昭島市: 326. 山梨文化財研究所編 2014『上つ原遺跡（第 2 次）・大塚日向遺跡』: 327. 山梨文化財研究所編 2014『竜ヶ峰遺跡第 4 次』多摩市埋蔵文化財調査報告第 69 集

#### 神奈川県

328: 奈良地区遺跡調査団編 1982『横浜市緑区奈良町奈良地区遺跡群（No.11）受地だいやま遺跡』: 329. 日本窯業史研究所編 2007『川崎区麻生区上麻生日光台遺跡』: 330. 三荷座前遺跡発掘調査団編 1997『川崎市高津区三荷座前遺跡第 2 地点発掘調査報告書』: 331. 藤根不動原遺跡調査団編 2007『藤根不動原遺跡発掘調査報告書』